



Hyogo Prefectural Museum of Archaeology

古代体験研究
フォーラム
2023

ホタルと三日月

これまでの経験
と
これからの体験

事業実施報告書

例言

本書は、兵庫県立考古博物館が令和6年3月17日（日）に実施した、古代体験研究フォーラム2023「ミュージアムとボランティアーこれまでの経験とこれからの体験ー」の事業実施報告書である。

本書には、フォーラムのテーマに基づいた最新の研究成果を掲載している。また、報告資料中にある写真には、来館中の児童生徒や、著作権の存在する作品等が映り込んでいるため、本書に掲載のある図版等の引用者による転載や改変は原則として不可とする。

なお、各執筆者・所蔵機関の承認や許諾を得る場合には、この限りではない。

本書の作成は、個々の論考については各執筆者が行い、表紙とチラシの作成は兵庫県立考古博物館の北川里奈が行った。それら以外は、兵庫県立考古博物館事業部学習支援課が執筆・作成を行った。また、本書の版組・レイアウト等の編集は同課が行った。

作成にあたっては下記の方々のご協力、各機関のご高配を賜った。記して感謝する（敬称略）。

萱原朋奈

神戸市立博物館

鬼本佳代子

姫路市立美術館

坂本 昇

伊丹市昆虫館

目次

1. 開催企図	P.1
2. フォーラム実施から報告書刊行までの経過	P.2
3. 申込者数と申込者の傾向	P.3
4. オンライン配信の実施体制	P.5
5. 当日の運営とタイムスケジュール	P.6
6. 配布チラシ	P.7
7. 事例報告	
(1) 永恵 裕和「兵庫県立考古博物館のボランティア」	P.11
(2) 萱原 朋奈「博物館と学習支援交流員」	P.21
(3) 鬼本佳代子「美術館のボランティア －姫路市立美術館、大原美術館、福岡市美術館－」	P.29
(4) 坂本 昇 「伊丹市昆虫館とボランティア －自然史 / 小規模博物館の現場から－」	P.34
7. トークセッション	P.44



1. 開催企図

古代体験研究フォーラム 2023 テーマ

「ミュージアムとボランティア」

1970年代から、博物館・美術館（以下、ミュージアム）で事業を開始したボランティア制度は、当初から、生涯学習や高齢者の社会参加を目的としていた。特に、1980年代の公立美術館の開館ラッシュを受け、ボランティア制度も急速に展開していった。

ミュージアムの全国的な増加と、それに伴う法制度が整備されていくなかで、ミュージアムのボランティアは、単なる施設の補助的役割や、生涯学習のためだけに提供された場にとどまらず、利用者とミュージアムの「かけはし」として、現在では、ミュージアムの運営を考える上で欠かせない存在となっている。

2007年に開館した、兵庫県立考古博物館でも、開館に先立って、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所普及活用班によって養成されたボランティアが、現在では22期生を迎えながら、長期間にわたり、当館とともに活動が続けている。

その一方で、ボランティア制度の創設時には、想定していなかった課題も多く出来てきている。代表的なものを上げると、①構成メンバーの高齢化、②求められる役割・機能の変化であろう。

特に、②求められる役割・機能の変化は大きい。人生100年時代と言われる現代にあっては、そもそも生涯学習や社会教育を受ける期間が、絶対的に長くなっただけではなく、受け手側の増加（高齢者の増加）といった事態を引き起こしている。

そこには、ボランティア＝志願、だけではない多様な欲求が、ボランティア活動ひいては活動先であるミュージアム側に求められている。

前述の2例にとどまらず、さまざまな課題がある中で、今回のフォーラムでは、館ごとの特性に合わせた、特色あるボランティア活動を実践している各分野のミュージアムの発表を通じて、ミュージアムがこれまで培ってきたことを共有し、これから進めていくことを参加者とともに学ぶことを目的とする。なお、今回のフォーラムでは以下の5点を論点として、発表やパネルディスカッションを進めることとする。

- （1）ボランティア制度の設計と変遷
- （2）ボランティア活動の実態
- （3）ボランティア活動にある課題
- （4）これからやってみたい活動、失敗した活動
- （5）ボランティア活動を充実させるものはなにか？

2. フォーラム実施から報告書刊行までの経過

(1) 館内検討

令和5年11月から、考古博物館内で、古代体験研究フォーラム2023のテーマ検討を開始した。令和5年5月8日より、新型コロナウイルス感染症が5類感染症へ移行したため、①対面での開催や、コロナ禍以前のように大中遺跡まつり（毎年11月第1土曜日に開催）前日に、館内で開催することも考慮されたが、オンライン配信手法の技術の蓄積や、より多くの方にフォーラムの内容を届けるという点を重視し、令和5年度もオンラインでの開催とすることとし、また本年度のテーマを「ミュージアムとボランティア」とすることを決定した。

(2) 候補者選定・打合せ

12月ごろから、萱原朋奈氏（神戸市立博物館）、鬼本佳代子氏（姫路市立美術館）、坂本昇氏（伊丹市昆虫館）に電話で連絡を取り、同テーマに関するフォーラムでの報告及びトークセッションへの参加の内諾を得た。

令和6年1年半ばごろから、神戸市立博物館・姫路市立美術館・伊丹市昆虫館へ赴き、3館で実施されているボランティア活動について、報告予定の3氏に説明・解説を頂きながら、フォーラム

に向けた打合せと、施設の実地調査を行った。

(3) 実施に向けて

1月末よりフォーラムのチラシ配布を実施し、フォーラムにかかる情報提供を開始した。また、令和5年度同様にウェブフォームの申し込みを1月28日から3月11日に募集を行った。

フォーラム当日に向け、報告者3名と永恵で2度の事前打合せ会をオンラインで実施した。第1回目は2月22日に実施し、永恵が趣旨説明と発表報告を、萱原氏が発表報告を行った。第2回目は3月12日に実施し、鬼本氏と坂本氏が発表報告を行った。各回とも、それぞれの発表報告を受けて、当日のトークセッションに向けた討議を行った。

3月13日には応募者に対し、フォーラムにかかるWebexにURLをメールで配布した。

(4) 実施後から報告書刊行まで

3月21日から、申し込み者に対して、事後アンケートの回答を依頼した。3月下旬から、報告者に報告原稿の執筆及びトークセッションの文字起こしにかかる校正を依頼し、本報告書の作成を進め、令和6年度に刊行・公開した。

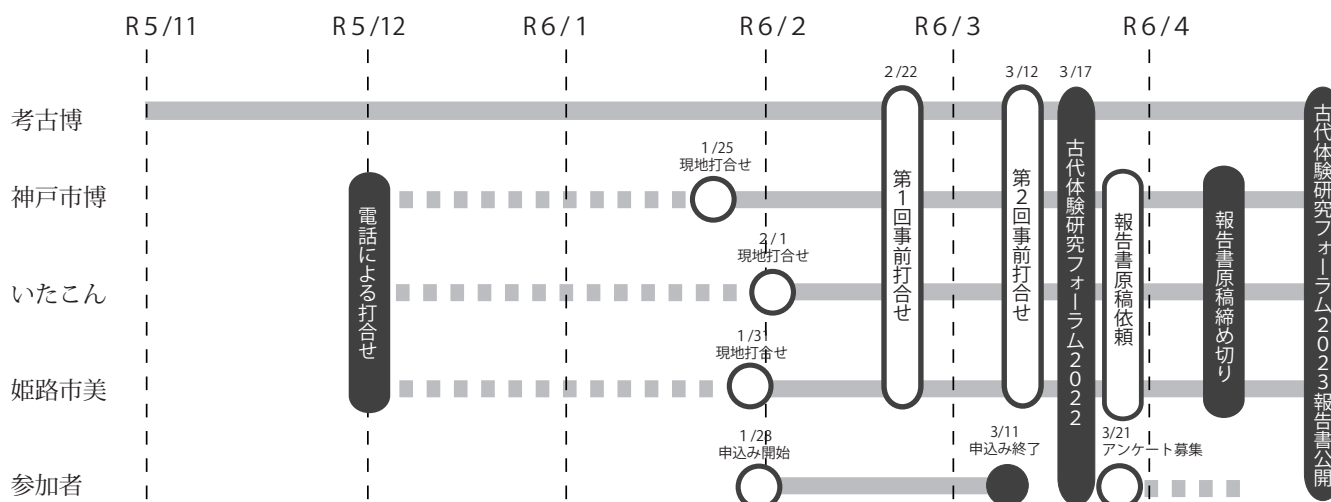


図1 開催までのタイムライン

3. 申込者数と申込者の傾向

(1) 参加申込み人数

今回のフォーラムでは、前述の通りウェブフォームによる参加申し込みを、令和6年1月28日から3月11日から実施し、総数で103人の申し込みがあった。

別表の通り、前3回の申し込み者数は、R2：65名、R3：112人、R4：81名であり、これまでで最大数となるR3に迫る申し込みとなった。

(2) 申し込み者の傾向

過去2年と当年の申し込み者の所属を、総申込数における割合で示したものが、図2である。なお、所属の分類については組織名に「〇立博物館」とある場合に「総合系」、「〇立歴史博物館」とある場合には「歴史系」といったように判断して分

類した。組織名のみで種別が不明の場合には、館報や当該館ウェブサイト等で、種別を判断し、分類した。

申し込み全体の傾向として、総合・郷土系、美術系、歴史系で過半数を占め、残りをその他の種別が占める。R3～R4年の傾向も同様であり、テーマに関わらず、どちらかといえば、今回のフォーラムが施設内を中心に活動する種別に訴求力が高いことがわかる。

R5の特徴として、歴史系博物館の申し込みが過去2年に比べ多いことが指摘できる。「ボランティア」というテーマが歴史系博物館にのみ「刺さる」テーマではないはずであるが、申し込みに占める割合が昨年度から2倍になっていること

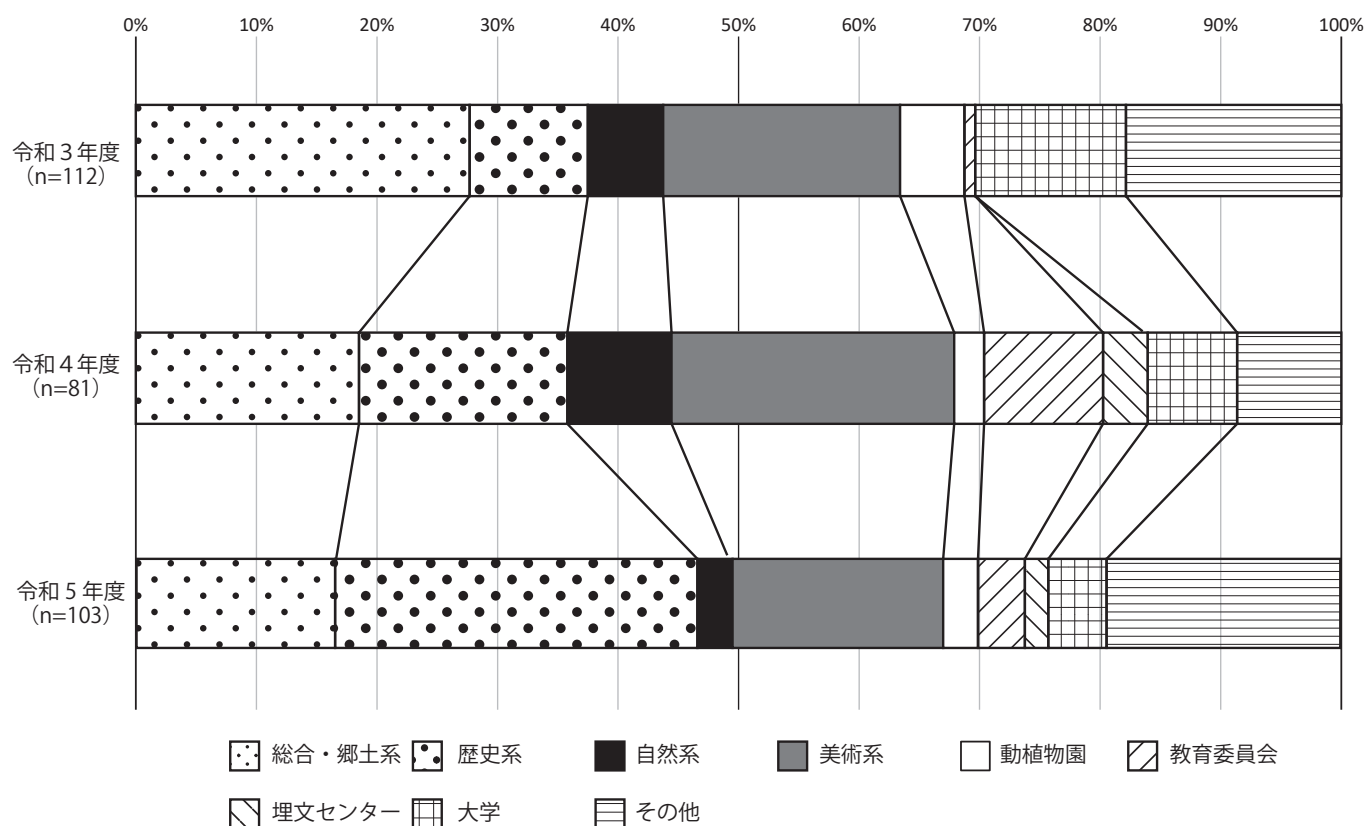


図2 参加申込者の所属割合（上段が令和3年度、中段が令和4年度、下段が令和5年度）

を考えると、歴史系博物館においてボランティア活動が課題となっていることが窺える。

また、その他に分類されるため、割合としては出てこないが、申込者の中には、現役のボランティアも少なくとも8名（部署名等に記載のあった方）が参加されていた点が特筆される。

私自身の認識不足があったことは、今回のフォーラムでのトークセッションで明らかとなったが、このテーマを選定した際には、いわゆる学芸員の参加を想定していた。冷静に考えてみれば、現役ボランティアにとってみれば、自らが参画している活動の詳細について知りたい、またより良くしたいと思うことは当然であり、そのためにミュージアム側の考えを知る、ということも十分想定できることであった。

今回のフォーラムが、参加された現役ボランティアにとって、良きものになったか甚だ不安しかないが、一方で、今回のテーマが、ミュージアム側だけでなく、そこに集うボランティアの興味も惹起する内容であったことは事実である。



図4 古代体験研究フォーラム 2021（R3）事業実施報告書
（QRコードは報告書へのリンク）



図3 古代体験研究フォーラム 2020（R2）事業実施報告書
（QRコードは報告書へのリンク）



図5 古代体験研究フォーラム 2022（R4）事業実施報告書
（QRコードは報告書へのリンク）

4. オンライン配信の実施体制

(1) オンライン配信体制

本フォーラムでは、昨年度と同様に、対面ではなく、オンライン配信のみを行った。

令和元年度末からのコロナ禍に伴って、急速に発展したオンライン配信であるが、今回のアンケートに示された意見のように、（会場までのアクセスコスト等が無くなることや、執務中での視聴が可能となったことにより、従来は参加したくともできなかった遠方の参加希望者にも参加の機会を提供することができた。コロナ禍での様々な「害」がある中から生まれた、新たな取り組みと評価している。

(2) 配信体制

実施にあたっては、当館体験学習室3を用い、室内に機材を設置し、メインスタジオとした。室

内の機器レイアウトは下図の通りである。

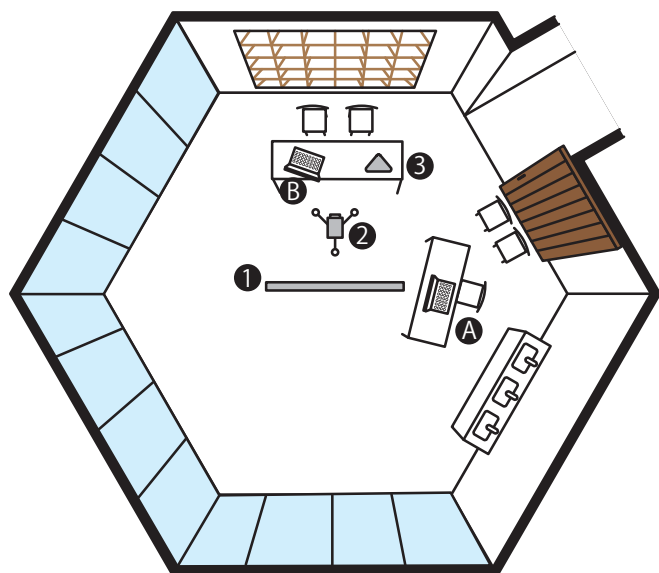
人員は、司会とは別に機器操作・配信担当に1名、それら以外の配信にかかる庶務担当に1名を配置した。

また、通信状況を確認するため、別室にて職員複数名によって、視聴を行い状況の把握した。

(3) 使用機器

パソコン以外の機器は、以下の通り。なお、パソコンはいずれも有線で館内インターネット回線と接続した。

- ・Web カメラ サンワサプライ CMS V50BK
- ・マイクスピーカー YAMAHA UNIFIED COMMUNICATIONS SPEAKERPHONE YVC-330
- ・モニター Panasonic TH65BF1J
- ・配信ソフト Cisco Webex



- A: ホスト PC 1: メインモニター
B: 発表者用 PC 2: ウェブカメラ
 3: マイクスピーカー

※1 A・Bともに有線でネット接続

※2 1～3はAと有線接続し、オンライン配信のホスト機

図6 体験学習室3でのレイアウト俯瞰図



写真1 オンライン配信のようす

5. 当日の運営とタイムスケジュール

(1) 当日の体制

前日（27日）に機器及び会場の設営を実施し、当日（28日）9:00からCisco Webexのミーティングルームを開設した。

報告者及び館長は、9:30から順次入室し、本番に向けた接続テストを実施した。

(2) タイムスケジュール

10:00～10:15 開会挨拶

（兵庫県立考古博物館長）

10:15～10:30 趣旨説明（学習支援課長）

10:30～11:10

「兵庫県立考古博物館のボランティア」

永恵裕和（兵庫県立考古博物館）

11:10～11:50

「博物館と学習支援交流員」

萱原朋奈（神戸市立博物館）

12:00～13:00 休憩

13:00～13:40

「美術館のボランティア 姫路市立美術館
大原美術館、福岡市美術館」

鬼本佳代子（姫路市立美術館）

13:40～14:20

「伊丹市昆虫館とボランティア」

自然史系／小規模博物館の現場から」

坂本 昇（伊丹市立昆虫館）

14:20～14:30 休憩

14:30～16:30 トークセッション

16:30～16:40 閉会挨拶

（兵庫県立考古博物館副館長）

(3) 当日の進行について

① オンライン配信

令和4年度のオンライン配信ソフトがZoomからCisco Webexへと変更となったことで、通信環境の安定性や個々の参加者のログインに対し、当館側での開催実績が無いという点で不安があったが、進行途中での通信環境の悪化や、参加者がログインできないという不具合は見受けられなかった。

ただし、Zoomに比べ、ログインに複数手順が必要であったため、開始時間前後にログインを試みた参加者にとっては、参加が遅れるといったことも、主催者側パソコンでのログイン状況からは若干見受けられた。

② チャット欄による質問書き込み

報告やトークセッションを踏まえた当日の質問や意見について、チャットでの書き込み方法とした。

不規則発言等により書き込み欄が荒れる懸念があったが、多数の質問や意見、自館での取り組みの紹介など、活発かつ適切な書き込みのみであった。これは、「顔が出ない」・「音声に伴わない」といった、参加者個人の視聴環境を暴露しない方法であったことが、各参加者のチャット欄への書き込みに対して心理的なハードルを下げたことが要因であると考えられる。

③ 進行について

進行について、大幅な遅延等もなく、ほぼタイムスケジュール通りの進行を行うことができた。

6. 配布チラシ

古代体験研究フォーラム2023

3/2024
17
日曜日
オンライン
10:00-17:00

ボランテアとミュージアム

これまでの経験とこれからの体験

16:30	14:30	13:40	13:00	11:10	10:30	10:00
開会あいさつ 	トークセッション	伊丹市昆虫館 坂本 昇氏	姫路市立美術館 鬼本 佳代子氏	神戸市立博物館 萱原 朋奈氏	兵庫県立考古博物館 永恵 裕和	開会あいさつ・趣旨説明

ボランティアは利用者とミュージアムの「かけはし」

多くのミュージアムで、職員だけでは足りない部分を補い、ミュージアムの魅力をさらに向上させる存在がボランティアです。

今回のフォーラムでは、特色あるボランティア活動を実践しているミュージアムに発表いただきます。

これまでやってきたことを共有し、ミュージアムとボランティア活動について一緒に考えてみませんか？

お問い合わせ

兵庫県立考古博物館
〒675-0142
加古郡播磨町大中1-1-1
☎079-437-5564

学習支援課
担当 永恵 裕和



参加無料
先着200名
事前申込み



オンラインで開催します

<https://www.hyogo-koukohaku.jp/>



7. 事例報告



兵庫県立考古博物館のボランティア

永恵 裕和（兵庫県立考古博物館）

Hyogo Prefectural Museum of archaeology and Our volunteer staff

NAGAE Hirokazu (Hyogo Prefectural Museum of Archaeology)

兵庫県立考古博物館 のボランティア

兵庫県立考古博物館
永恵裕和

1

1. 兵庫県立考古博物館

- ・平成元年(1989)に
兵庫県教育委員会
埋蔵文化財調査事務所に
開設
- ・平成19年(2007)開館



3

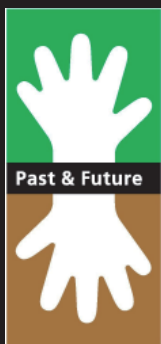
1. 兵庫県立考古博物館

- ・平成19年(2007)開館

- ・【基本理念】

本物の遺跡・遺物に触れることによって
得た、先人たちの「知恵」と「生きる力」への
「驚き・発見・感動」を身近な歴史文化
遺産への関心へと結びつけ、地域文化
を再発見するきっかけをつくり、地域文化
に根ざし、愛着と誇りがもてる21世紀
における新たな「ひょうご文化」の創造に
寄与する

▷ 過去の営みをととして未来を創造する



2

発掘ひろば



テーマ展示室のようす1



4



兵庫県立考古博物館の外観

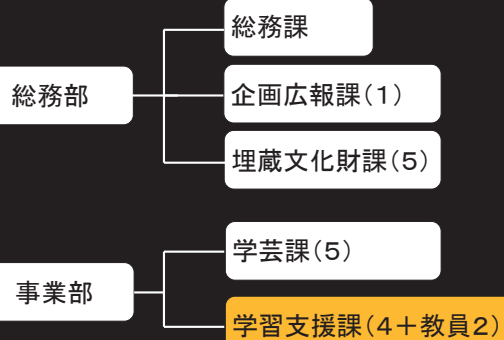
5

2. ボランティア（考古楽者）活動

- (1) 平成14年(開館5年前)から養成講座(約1年間)開始。
(開館時:117名修了。令和5年6月現在:457名修了。)
- (2) 博物館ボランティア登録 128名(令和6年2月現在)
▷1年毎の更新。年齢制限なし。
- (3) 博物館ボランティアとして、①古代体験指導、②学校
対応、③グループ活動、④古代体験講座の補助など
- (4) 「ひょうご考古楽倶楽部」を組織して活動
- (5) ボランティアにかかる費用は、ボランティア保険のみ

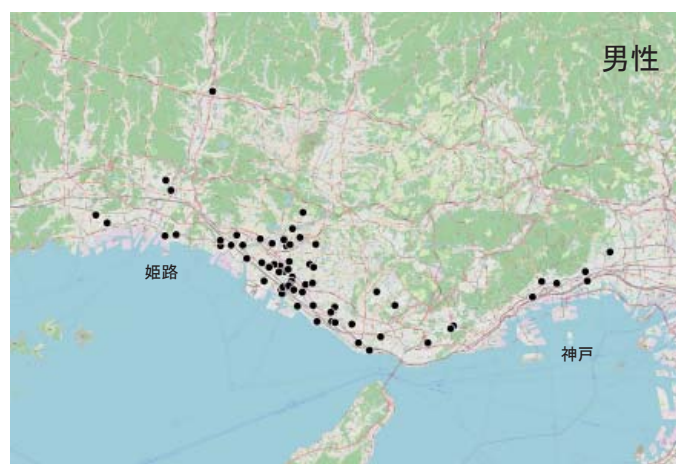
8

1. 兵庫県立考古博物館



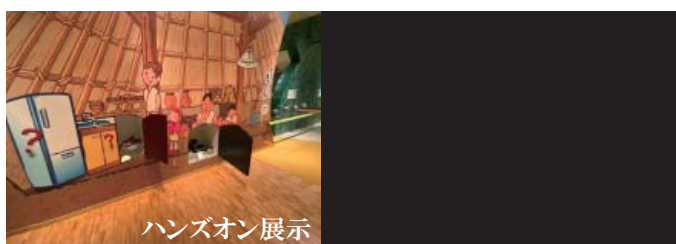
※括弧のなかは、専門職員の数

6



・ボランティアの居住地分布1

9



ハンズオン展示



テーマ展示室の様子2

7

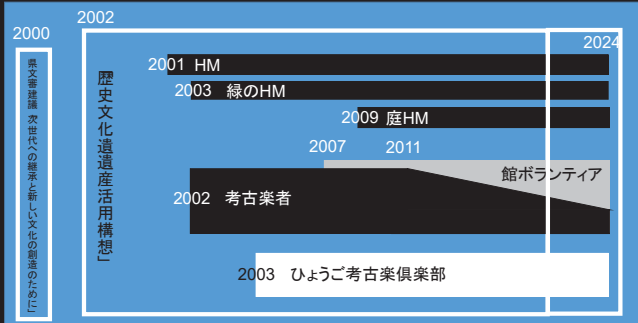


・ボランティアの居住地分布2

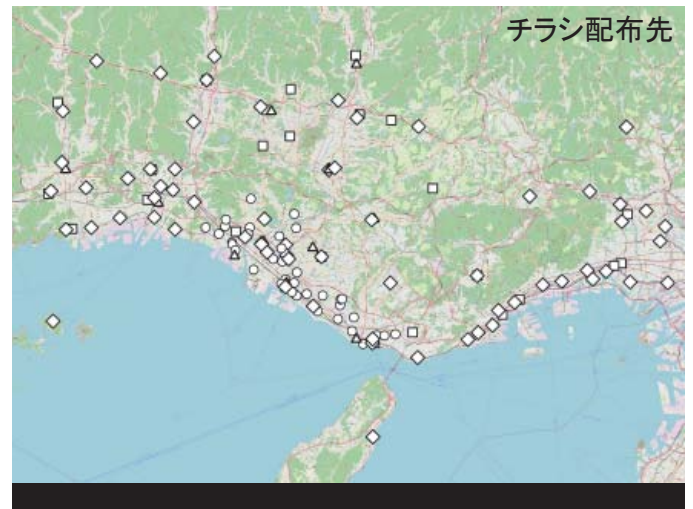
10

2. ボランティア（考古楽者）活動

(2) ボランティアの成立変遷



17



20

2. ボランティア（考古楽者）活動

(3) (仮称) 考古博物館に向けた 先行ソフト事業



18



21

3. ボランティアの養成

(1) 募集と人数

- ① 募集時期: 例年、4月頃から募集を開始。
- ② 募集人員: 20名前後
- ③ 募集方法: 館Website、チラシ掲示・配布

(2) 養成研修の期間

- ・6月頃～11月頃(月に1回程度)
- ・8～9月は、「いつでもできる古代体験」で実習
- ・11月には登録を開始し、ボランティアとして活動

(3) 養成にかかる費用

- ・ボランティア保険(1人500円)×人数分

19



22



23



26

3. ボランティアの養成

スケジュール ※研修参加費は無料ですが、材料費が必要な場合があります。研修ではボランティア保険に加入します(当館負担)。

No.	日にち	時間	内容
1	6月 3日(土)	13:00 ～16:00	1 開講式・オリエンテーション 2 【講義】博物館ボランティアについて
2	6月 17日(土)	13:00 ～16:00	1 【講義】博物館の展示案内 2 【講義】考古館における来館者との接し方
3	7月 1日(土)	13:00 ～16:00	1 【実習】古代体験実習 1 火おこし 2 【実習】古代体験実習 2 組ひも
4	7月 22日(土)	13:00 ～16:00	1 【実習】古代体験実習 3 勾玉づくり 2 【実習】古代体験実習 4 石包丁づくり
5	9月 3日(日)	13:00 ～16:00	1 【講義】考古学入門 2 【講義】大遺跡の歴史と特異一遺跡解説のために一
6	9月 17日(日)	13:00 ～16:00	1 【講義】博物館における展示解説 2 【実習】展示解説
7	10月 1日(日)	13:00 ～16:00	1 閉講式・事務連絡・ひょうご考古倶楽部紹介
8	7/22(土) ～8/31(木)	9:50 ～16:00	1 【実習】ボランティア実習 2回以上 体験学習室1での古代体験指導

※日程・内容等変更になる場合があります。

24



27

3. ボランティアの養成

スケジュール ※研修参加費は無料ですが、材料費が必要な場合があります。研修ではボランティア保険に加入します(当館負担)。

No.	日にち	時間	内容
1	6月 3日(土)	13:00 ～16:00	1 開講式・オリエンテーション 2 【講義】博物館ボランティアについて
2	6月 17日(土)	13:00 ～16:00	1 【講義】博物館の展示案内 2 【講義】考古館における来館者との接し方
3	7月 1日(土)	13:00 ～16:00	1 【実習】古代体験実習 1 火おこし 2 【実習】古代体験実習 2 組ひも
4			
5			
6	9月 17日(日)	13:00 ～16:00	1 【講義】博物館における展示解説 2 【実習】展示解説
7	10月 1日(日)	13:00 ～16:00	1 閉講式・事務連絡・ひょうご考古倶楽部紹介
8	7/22(土) ～8/31(木)	9:50 ～16:00	1 【実習】ボランティア実習 2回以上 体験学習室1での古代体験指導

※日程・内容等変更になる場合があります。

これらに加えて、個別に面談を実施し、希望と内容のミスマッチを防ぐ

25



28

4-1. 古代体験指導

(1) いつでもできる古代体験

- ①勾玉・石包丁づくり、②火起こし、③組紐を開館時には、10時～15時30分の間で実施。
- この古代体験の指導を、ボランティアに担ってもらう。

(2) シフト制による人数の把握

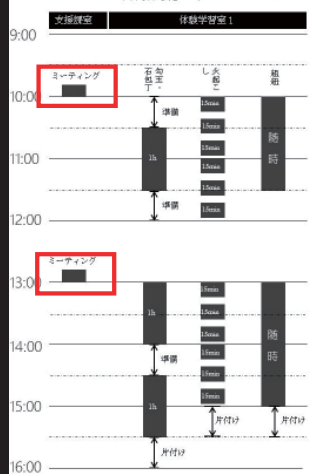
- 平成29年(2017)から導入
 - ▷指導へ出るボランティアが固定化+出席率が悪い
- ボランティア登録の更新時に、1年間のシフト表を提出
 - ▷都合による変更は随時実施可
 - ▷申告日以外の出席は大歓迎



29

32

「いつでもできる古代体験」のタイムスケジュール



30



33

4-2. 学校対応

(1) スポット解説

- 展示室内で、立って解説する。
- 解説というよりは、問いかけや簡単な質問に答える。
- ▷職員は、学校団体につき最低1名は付くので、詳しい質問は、職員に。

(2) 学校向け古代体験

- ①勾玉・石包丁づくり、②火起こし、③組紐を曜日ごとに分けて実施(1日1体験)
- グループを基幹とし、グループ外のボランティアも入る。

31

4-3. グループ活動

(1) 研鑽を積むための、グループ活動

- 8グループからなり、ボランティアはいずれかに必ず属する。
- ①ツアー解説、②土器づくり、③勾玉・石包丁、④火起こし、⑤組紐、⑥かごづくり、⑦大中遺跡、⑧展示学習
- それぞれが、学校対応や館の事業に紐付いた活動

(2) 開催頻度

- 繁忙期(4～6月)を除いて、月1回
- 担当の職員が例会に出席し、学校や団体の対応に向けた調整や、ボランティア活動の研鑽を図る

34



35



38

4-4. 古代体験講座

(1) 古代体験講座とは

- ・6月ごろから開始する、予約制の古代体験講座
- ・約30近くの講座を実施し、「いつでもできない」古代体験を応募者に提供する。



39

36

古代体験講座			【予約制】 参加費 500円（材料費 100円）		
5/5 横文のプレスレット 貝殻をつくらう！	3/5～4/5	3/5～4/5	5/24 はにわくをつくらう！	6/24～7/24	6/24～7/24
5/19 縄文時代の食器がい	3/19～4/19	3/19～4/19	5/24 はにわくをつくらう！	6/24～7/24	6/24～7/24
6/2 縄文ワーク 神功皇后伝説を歩く	4/2～5/2	4/2～5/2	5/24 はにわくをつくらう！	6/24～7/24	6/24～7/24
6/22 好きな動物の土製品をつくらう！	4/22～5/22	4/22～5/22	5/24 はにわくをつくらう！	6/24～7/24	6/24～7/24
7/14 玉が玉のネックレスをつくらう！(ジュニア)	5/14～6/14	5/14～6/14	5/24 はにわくをつくらう！	6/24～7/24	6/24～7/24
7/21 はにわくをつくらう！(クラフト)	5/21～6/21	5/21～6/21	5/24 はにわくをつくらう！	6/24～7/24	6/24～7/24
7/28 夏の生活で染めものをつくらう！	5/28～6/28	5/28～6/28	5/24 はにわくをつくらう！	6/24～7/24	6/24～7/24
7/28 はじめての土器づくり	5/28～6/28	5/28～6/28	5/24 はにわくをつくらう！	6/24～7/24	6/24～7/24
8/3 平家(えと)のメダルをつくらう！	6/3～7/3	6/3～7/3	5/24 はにわくをつくらう！	6/24～7/24	6/24～7/24
8/4 石版書をネットレスにしてみよう！	6/4～7/4	6/4～7/4	5/24 はにわくをつくらう！	6/24～7/24	6/24～7/24
8/21 キリリ！ガラスが玉づくり	6/21～7/21	6/21～7/21	5/24 はにわくをつくらう！	6/24～7/24	6/24～7/24
パッケージド見学ツアー			パッケージド見学ツアー		
7/24・7/25 13:30～14:30(14:30～15:30)			7/24・7/25 13:30～14:30(14:30～15:30)		
8/14・8/21 10:00～11:00(11:00～12:00)			8/14・8/21 10:00～11:00(11:00～12:00)		

37



40

6. ひょうご考古楽倶楽部

(1) 概要(会則より)

- ・令和5年(2023)で、設立20周年
- ・事務局を、**考古博物館内に置く組織**
- ・考古楽者(博物館ボランティア)養成セミナーを修了した「**考古楽者**」が、兵庫県立考古博物館で**ボランティア活動をする**とともに**考古学を楽しむ**、**会員相互の親睦を図る**ことを目的とする。
- ・入会には、年会費と入会届出が必要

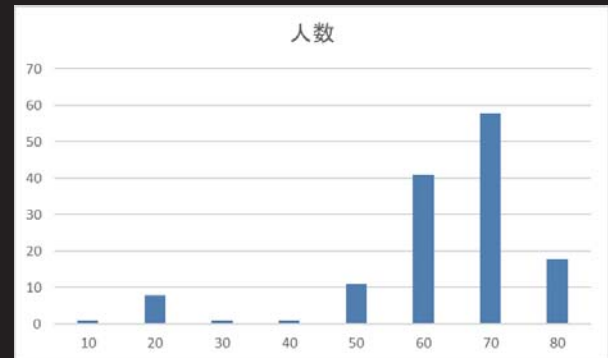
(2) 活動組織

- ・総会・・・年1回開催
- ・幹事会・・・選任された役員からなる。随時開催
- ・懇談会・・・幹事会と博物館幹部の懇談会。月1回開催。

41

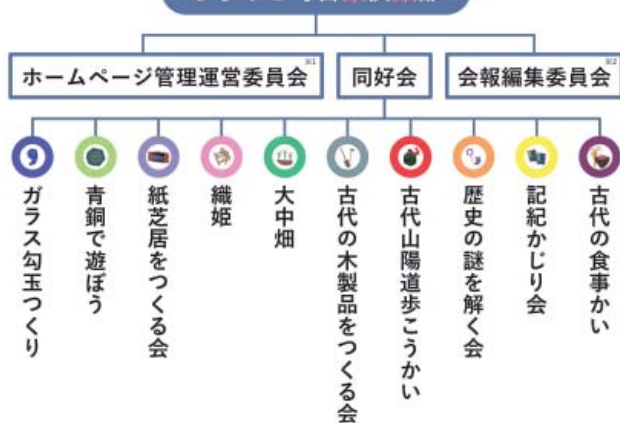
7. 当館の課題

(1) ボランティアの技術伝承=役割の固定化



44

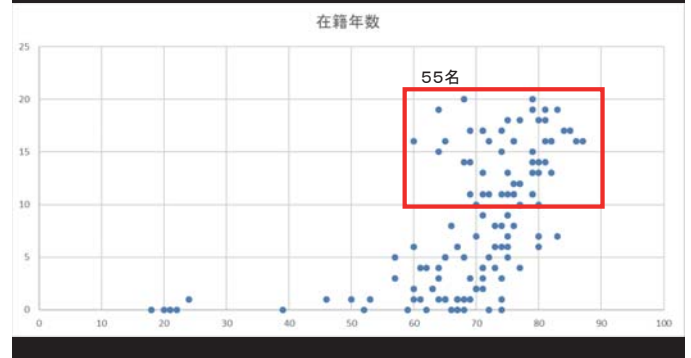
ひょうご考古楽倶楽部



42

7. 当館の課題

(1) ボランティアの技術伝承=役割の固定化



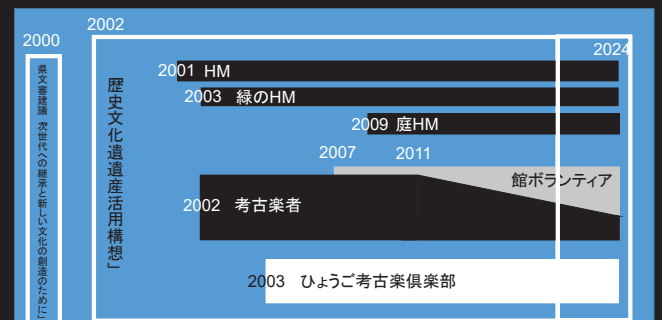
45



43

8. 当館の課題

(2) 開館前後でのボランティアの気概の違い



46

4. さいごに



・はじめてミュージアムと出会う児童・生徒に、
私たちは何を伝えることができるのだろう。

博物館と学習支援交流員

萱原 朋奈（神戸市立博物館）

Kobe City Museum and our Volunteers for Learning Support Exchange

KAYAHARA Tomona (Kobe City Museum)

博物館と 学習支援交流員

神戸市立博物館学芸課
萱原朋奈



自己紹介

- ▶ 萱原 朋奈(かやはら ともな)
- ▶ 考古学専攻
- ▶ 平成31年 4月 神戸市に就職(教育委員会文化財課)
…発掘調査などに従事
- ▶ 令和4年 4月 神戸市立博物館へ異動
(文化スポーツ局博物館学芸課)
…展覧会、教育普及、考古資料など

神戸市立博物館

- ▶ 市立南蛮美術館と考古館を統合し、
新しい人文系の博物館として
昭和57年(1982)秋に開館
- ▶ 博物館の建物(は、昭和10年(1935)竣工の、
旧横浜正金銀行(現 三菱UFJ銀行)神戸支店
ビルを転用
- ▶ 「国際文化交流－東西文化の接触と変容」
を基本テーマとし、これにそった活動展開
- ▶ 2019年リニューアルオープン



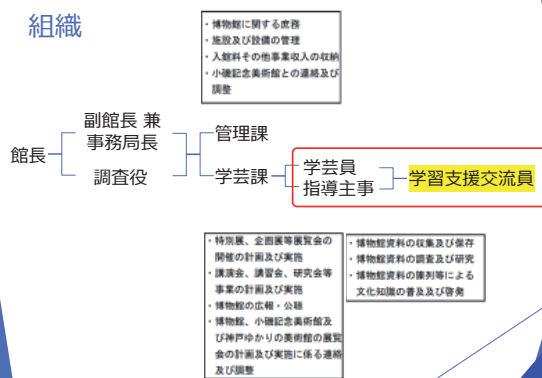
- ▶ 神戸市立博物館について
- ▶ 学習支援交流員について
・概要、活動内容など
・導入・構想について
- ▶ 課題
- ▶ 目標

館蔵品

- 考古・歴史資料
- 美術資料
- 古地図資料



組織



神戸市立博物館の 学習支援交流員



1階



学習支援交流員

市民参画を進める開かれた博物館とするため、平成20年度より「博物館学習支援交流員」を導入

「学習支援交流員」は、博物館の基本方針に基づき、**興味、経験、知識、技能などを活かしながら行う来館者サービスを通して社会に貢献し、人と人との交流や生涯学習の促進をはかることを目的とした活動を行う**



2階



3階



登録

↓ 博物館HP
(学習支援交流員ページ)



- ▶ 登録期間は1年
- ▶ 1年毎更新で、5年まで更新可能
- ▶ 更新期間終了後の再応募は不可
- ▶ 5年終了後...アドバイザー制度(後述)

応募資格

- ▶ ① 満18歳以上の方
 - ▶ ② 博物館の使命および理念と目的、基本的性格を理解し、自発的に活動できる方
 - ▶ ③ 週1～3回程度(月4～8回程度)活動できる方。
 - ▶ ④ 博物館が実施する事前の研修(全4回)に参加できる方
- ※すべての研修に参加することが学習支援交流員の登録(更新)要件

地階



学習支援交流員アドバイザー制度

- ▶ 交流員の活動を支援し、その活動の活性化を図るために「学習支援交流員活動アドバイザー」(以下「アドバイザー」)制度を導入
- ▶ アドバイザーは、交流員の登録期間年限の5年を経過した者のうちから、博物館が依頼し、それを承諾した場合、登録することができる
- ▶ アドバイザーの登録期間は1年。

ただし、博物館が必要と認める研修を受講したアドバイザーについては、その登録期間を更新することができる。

アドバイザーの活動内容

- ▶ 博物館がかかげる学習支援交流員の目的を達成するために、これまでの交流員活動で得たノウハウを活かし、活動内容について、交流員を支援し、交流員活動全体の活性化をはかるための活動環境づくりを博物館及び交流員と協働で行う。

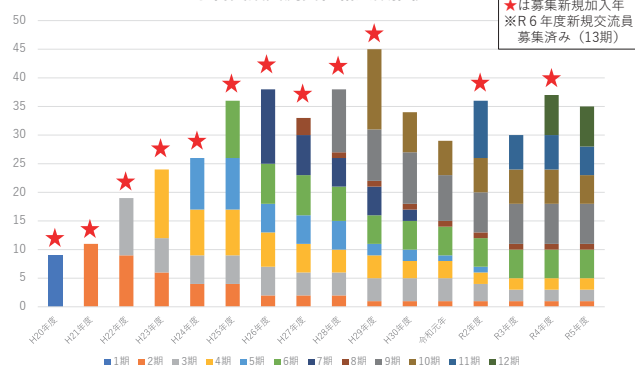
活動内容

- ▶ ①学習支援交流員が企画、運営するワークショップなど教育普及事業に関する活動。
- ▶ ②体験学習室での来館者、学校団体案内や学習支援及び体験学習室の運営に関する活動。
- ▶ ③博物館が主催する講座、ワークショップ、講演会などの教育普及事業に関する支援。
- ▶ ④その他、博物館が必要とする事業に関する活動。
- ▶ ⑤連携授業（学校での授業）での支援。

※毎月1回、学習支援交流員全員が出席する定例会を開催
 ※学習支援交流員が活動内容の充実や新たなプログラムを開発するために、自主的に学習会や勉強会を開催することもある（学芸員、指導主事が講師として参加）。

⇒教育普及活動

学習支援交流員在籍人数推移



- ▶ 活動時間 午前 9 時30分頃～午後5時00分頃
 →この時間内であれば、いつ活動してもOK
- ▶ 報酬等
 交通費を含め、活動にかかわる報酬の支給はない
 ボランティア保険には、博物館で加入

導入・構想について

研修（登録・更新のため）

60分～90分程度

	内容	受講者
11月～12月	【新規交流員募集・採用】	
1月	・博物館オリエンテーション ・交流員活動体験	新規採用者
1月	・服務研修	新規採用者
2月	・応対研修（外部講師）	新規採用者 交流員・アドバイザー
3月	・人権研修	新規採用者 交流員・アドバイザー

服務研修…よりよい活動をするためのルールや注意義務の研修
 応対研修…来館者へのより良い対応と交流をめざして、実習を交えた研修
 人権研修…博物館での「人権」の考え方についての研修

学習支援交流員の導入～活動開始

- ▶ 2005年 館内での調整・コンセンサス形成・共同参画・生涯学習の場の提供を構想
- ▶ 2006年 導入に向けての制度設計・第1期の募集
- ▶ 2007年 研修・第1期（9名）の活動開始

学芸員と学習支援交流員

学芸員は学習支援交流員の活動をサポート

- ▶ ワークショップに必要な素材等の購入
- ▶ ワークショップイベント広報
 （博物館HP、SNS、広報誌、館内外での掲示、チラシ）
- ▶ 定例会の開催、研修・勉強会の調整、提供
- ▶ 関係各所との調整
- ▶ 更新・登録等の事務
- ▶ ワークショップ引率
- ▶ 連絡・相談対応

・連絡…メール（電話）、ホワイトボード活用
 ・活動日誌確認

博物館における活動とは

- ▶ 一般市民の博物館事業参画だけが目的化してしまうような導入は本末転倒。
- ▶ ボランティアとは本来、生命や生活を脅かされている人々を支えることで、金銭ではなく至高の使命感と充足感を獲得するために活動する人々であるはず。博物館でそのような活躍の場はあるのか？

- ▶ 博物館の活動の3本柱は
調査研究に基づいた資料の「収集」「保管」「展示」
→これらを支えるために「普及」「広報」などの諸業務がある。

- ▶ 単に、諸業務を補助するだけのボランティアに意味があるのか？
→博物館活動の根源である上記の3本柱に貢献できてはじめて、
博物館にとっても参加者にとっても良い活動となるのでは？

初年度（第1期）の課題

- ▶ 学習支援交流員が描く像と、
当館の「学習支援交流員」の理想がかみ合わなかった。
- ▶ あたえられた場所（学習室）の活用が見出せない。
- ▶ 当館は「自発性」「開発性」を求め、
学習支援交流員は「ルーチン化」された仕事を期待。
- ▶ 「いきなりハードルが高すぎた」という声も。

当館の理念

- ▶ 博物館職員の仕事の肩替わりだけをさせてはいけない。
- ▶ 業務請負型ではない = 事業創出型
- ▶ 参加者自身の生涯学習としての側面
- ▶ 参加者自体がもつ「自発性」「社会性」「無償制」
→それに加えて「開発性」も加えた。

⇒「学習支援交流員」

2008年度から

- ▶ アンケート集計・ポスター発送業務など
- ▶ 居留地マップ作成
- ▶ ミュージアムツールボックス
- ▶ 連携授業への参加

学習支援交流員の導入～活動開始

- ▶ 2005年 館内での調整・コンセンサス形成・
共同参画・生涯学習の場の提供を構想
- ▶ 2006年 導入に向けての制度設計・第1期の募集
- ▶ 2007年 研修・第1期（9名）の活動開始

2010年度からのステップアップ

- ▶ 自主企画のスタート
ブレインストーミングと意見交換
ワークショップとツールボックスの企画立案
- ▶ ワークショップ⇒補助主体から運営主体へ
- ▶ 入館者とのコミュニケーション

初年度の構想

- ▶ ワークショップの補助運営
- ▶ 常設展示中の居留地ツアー
- ▶ 学習室での補助

⇒1期交流員は1年で辞退…

これまでに開発したツールボックス

- ①「居留地マップ」の作成
- ②博物館収蔵の重要文化財「南蛮屏風」を活用した扇子作りキット
- ③伊能小図 西日本図・北海道図の大きさや正確な測量ができる観察用マット
- ④伊能小図 西日本図と現代地図を見比べることができるパズル
- ⑤歩測用用具の作成（梵天、メジャー、パネルなど）
- ⑥紙芝居「推歩先生」（伊能忠敬の生涯）
- ⑦学習室体験学習用の貫頭衣
- ⑧触って魅力を感じる居留地マップ
- ⑨館蔵品に関係する人の紙芝居
- ⑩土器の模様をつしとる拓本
- ⑪浮世絵摺りの体験ができる浮世絵版木
- ⑫紙コップで国宝桜ヶ丘銅鑄づくり
- ⑬切り模様で万華鏡づくり などなど

※現在、実施していないツールボックス
ワークショップも含まれます

現在実施しているワークショップ	
居留地ツアー	月1回
古代のもよう 土器の拓本をとろう！	不定期
浮世絵に挑戦！	不定期
歩測体験	不定期
紙芝居	不定期
紙コップで銅鐸をつくろう	不定期
びいどろ万華鏡	不定期

★体験学習室での来館対応（不定期…交流員活動日のみ）
→貴頭衣体験、乾拓体験、居留地マップ説明を実施

目標

- ▶「学習支援交流員」は、博物館の基本方針に基づき、興味、経験、知識、技能などを活かしながら行う来館者サービスを通して社会に貢献し、人と人との交流や生涯学習の促進をはかることを目的とした活動を行う
- ▶ 自主性をもった活動の継続、向上性
- ▶ アドバイザーから交流員への技術継承

⇒利用者のニーズを満たし、
それにより、市民に開かれた博物館の構築を推進する

ワークショップの開催



居留地ツアー

体験学習室での活動



ご清聴ありがとうございました

外部イベントへの参加



課題

- ▶ 交流員・アドバイザーの活動意思と博物館側の考えの差
- ▶ 人間関係、コミュニケーション
- ▶ 活動意思や意欲の向上
- ▶ 予算とワークショップ
- ▶ 交流員・アドバイザーの技能を生かしているか
- ▶ コロナ禍による活動制限の影響
- ▶ 技術継承

美術館のボランティア

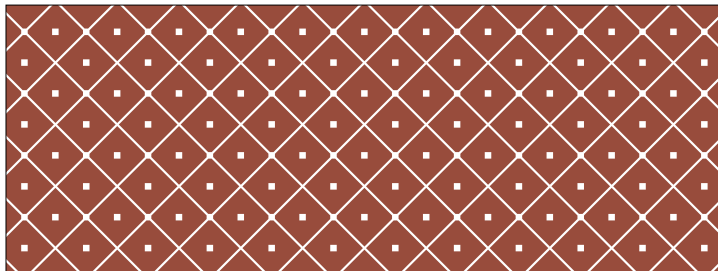
— 姫路市立美術館・大原美術館、福岡市美術館 —

鬼本 佳代子（姫路市立美術館）

Art Museum and volunteers

— Himeji City Museum of Art, OHARA MUSEUM OF ART, Fukuoka Art Museum —

NAGAE Hirokazu (Hyogo Prefectural Museum of Archaeology)



美術館のボランティア

姫路市立美術館、大原美術館、福岡市美術館

兵庫県立考古博物館
オンラインフォーラム
2024年3月17日
姫路市立美術館 鬼本佳代子

大原美術館
1930年開館 私立美術館



ボランティア
(アテンダント) 導入
2003年

福岡市美術館
1979年開館 市立美術館



ボランティア導入
1976年

姫路市立美術館
1983年開館 市立美術館



ボランティア導入
1983年

自己紹介

名前：鬼本佳代子（おにもと かよこ）

所属：1997年～2008年、2012年～2023年 福岡市美術館

2008年～2012年 大原美術館

2023年～ 姫路市立美術館

専門：美術館・博物館教育

（大学・大学院では15世紀ネーデルラント絵画やフランス写本を研究していました）

ここでちょっと歴史の話・・・ 日本における「ボランティア」の 広がり

「ボランティア」という言葉は既に明治期には日本に入ってきていた・・・らしい。

3つの美術館ボランティアの事例

姫路市立美術館

大原美術館

福岡市美術館

1970年代 家庭婦人の社会教育活動としてのボランティア

1971年 社会教育審議会答申

家庭婦人は、都市においては、その居住する地域で昼間人口の大部分を構成し、農村においては基幹的な労働力となって生活しており、いずれも居住地域における中心的な存在となっている。これらの婦人には、地域における連帯意識の形成のため、ボランティア活動の展開が期待され、その拠点としての施設の設置、整備が望まれる

★1976年福岡市美術館ボランティア導入

日本の公立美術館で 最初にボランティアを導入したのは？

1974年 北九州市立美術館ボランティア
日本の公立美術館で初めてのボランティア
主婦層を対象とした活動だった

ミュージアムボランティアの 特徴

ミュージアムが「活動」を決めて「募集」していることが非常に多い。
厳密な意味で自発的なボランティアは少ない。

1980年代 美術館建設ラッシュ

1970年代後半から、特に1980年代に、市町村区立の美術館が
「雨後の筍」のように開館する。
館の個性に合わせたボランティア活動を行う美術館が出てくる

★1983年 姫路市立美術館ボランティア導入

事例1 姫路市立美術館のボランティア ～友の会から始まった公立館ボランティア

兵庫県姫路市の市立美術館。
赤煉瓦の建物は、1905年に建てられた陸軍第十師団の兵器廠
戦後市役所に
1983年美術館としてリニューアル
ボランティアもこの年に発足
友の会から有志を募って始まった
関西では早い方



1990年代 ボランティア活動への積極的な注目

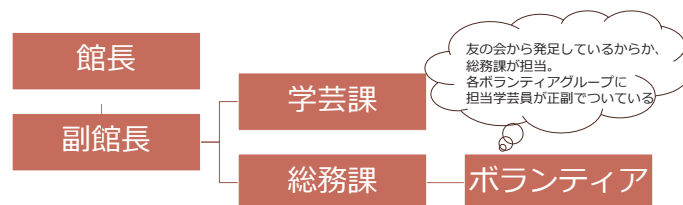
1992年 生涯学習審議会答申

当面重点を置いて取り組むべき4つの課題の一つにボランティア活動の支援・推進が取り上げられる。

1995年 阪神淡路大震災

「ボランティア」という言葉・概念が一般に普及。ボランティア元年とも言われる。

組織



2000年代 ボランティアの新しい波

1999年 特定非営利活動促進法（NPO法）施行

2007年以降の団塊世代大量退職

文化施設でのボランティア導入の増加

だれでもが参加できる社会活動としてのボランティア

★大原美術館アテンダント導入

→ボランティアという言葉を使わないボランティア

★当初の活動

- ・最初に簡単な研修
- ・美術館から依頼する特別企画展示室の会場監視

★1991年頃から班活動という形で新しい活動が構想される

- ・事務補助班
友の会や美術館の発送作業を行う
- ・研修班
ボランティアの研修や親睦を企画運営する
→美術館の教育普及活動の補助に携わることに
- ・監視運営班
会場監視活動の自主運営を目指す
→マネジメントが必要ということで友の会事務局が行うことに
- ・・・・班の統合と分裂を繰り返し現在8つのグループが活動

活動

姫路市立美術館ボランティアとは・・・ボランティアの手引きによると
・美術館におけるボランティア活動は教育普及として位置づけられ、美術館が参加者にその活動を通して生涯学習の場を提供する市民サービスです。美術館は積極的な利用者であるボランティアの皆さんの自己研鑽に資するメニューを提供できるよう事業を推進しています。

- ・現在、8つのグループに分かれ、148人が活動。
- ・掛け持ちしているボランティアも
- ・各グループにリーダーが1人
- ・募集：各グループの必要人数をボランティアが美術館に申告し、美術館が毎年募集
- ・研修：全体研修を募集時に1回 あとは各グループで・・・

新聞アーカイブ班



イベント補助班



資料整理班



ガイドスタッフ班



彫刻ワーキンググループ



事務補助班



編集班



絵本よみきかせ班



活動

- ・手荷物預かり→コロナで中止
 - ・毎週土曜日13:30～ 日曜日10:00～
フレンドリートークの実施
 - ・発送作業
 - ・図書整理
 - ・学校団体へのギャラリートーク
 - ・チルドレンズアートミュージアムのスタッフ
→コロナで中止
- 全員が同じ活動をする
募集は当時は毎年行っていた
現在39人が活動中

ボランティアリーダー会議



大原美術館 アテンダント・スタッフガイドライン

- 【設置】** 公益財団法人大原美術館（以下美術館）は、恒常的に活動するボランティア・スタッフである「大原美術館アテンダント・スタッフ」（以下、アテンダント・スタッフ）を設置します。
- 【目的】** アテンダント・スタッフは、大原美術館の使命宣言にもとづき、その活動をサポートし、広く美術および美術館と利用者との架け橋として活動することを目的とします。
- 【設置者の義務】** 美術館は、アテンダント・スタッフに対し、その活動目的を達成するために、就業時に研修を行い、その後も、必要に応じて十分な研修や勉強会、その他の支援を行います。
- 【具体的な活動および運営】** アテンダント・スタッフは、上記の目的と大原美術館使命宣言にもとづき活動を行います。

今はまた変わっていると思います・・・

事例2 大原美術館のアテンダント ～老舗私立美術館の後発ボランティア

大原美術館

1930年 日本で最初の「西洋美術館」として

岡山県倉敷市に開館した私立美術館

実業家・大原孫三郎がパトロンとなり、画家・児島虎次郎がヨーロッパにて収集した作品を元に開館。
そのミッションは「未来の画家たちの教育のため」

2003年 「アテンダントスタッフ」を募集。

ボランティアと呼ばないボランティア

事例3 福岡市美術館のボランティア ～老舗ボランティアは何度かの危機を超えて

1979年 福岡市の大濠公園に開館した
政令指定都市の市立美術館

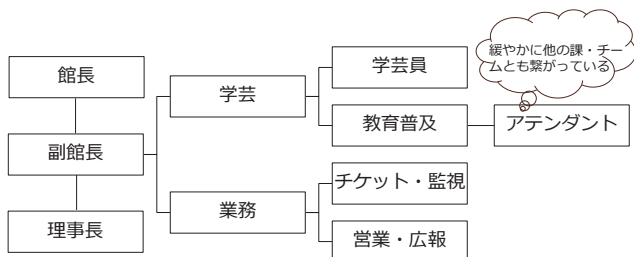
1976年7月 開館の前に

「福岡市民の社会奉仕の意識および芸術に関する一般教養を高め」るため、第一期のボランティアを募集。

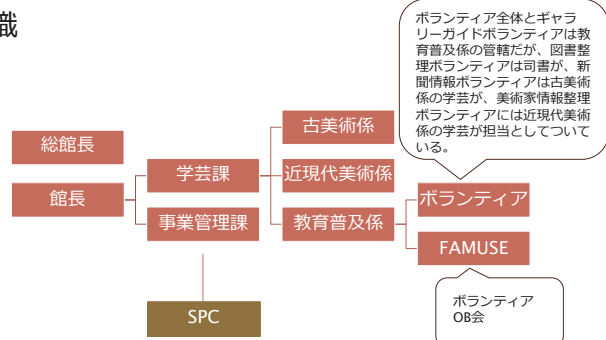


組織

以下、2010年前後（覚えている限りですが・・・）



組織



1976年 ボランティア募集80名定員のところ、
157名の応募がある。
抽選などにより90名が8月から養成講座に参加。
しかし・・・研修が進むにつれ、人数激減。

1977年4月 早くも2回目の募集を行う。

1979年9月 厳しい～研修を終え、
46名の福岡市美術館ボランティア誕生



活動



ギャラリーガイドボランティア

1979年11月3日 福岡市美術館開館！
ボランティアの最初の活動は図録販売補助
そのほか、新聞切り抜き、講座名簿作り、受付業務
展覧会案内の宛名書き、発送作業などを行う

1984年 観光バスが美術館に乗り入れるようになったのを
きっかけに「解説ボランティア」誕生。
このあたりから新聞ボランティア、図書ボランティア、
解説ボランティアの3グループにわかれる。



図書整理ボランティア

だがしかし・・・こんな危機も

新聞スクラップが滞る
観光バスの打ち切り
長い間新規ボランティアの募集がない・・・



新聞情報ボランティア

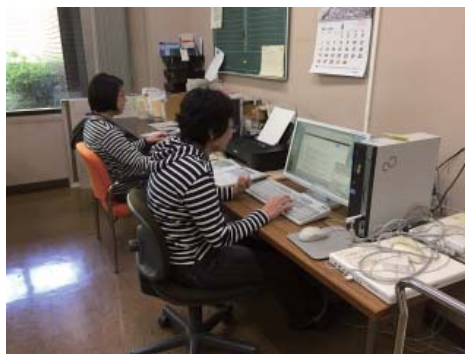
黒歴史？から現在までの道のり

2004年12年ぶりに新規ボランティア募集

ボランティアガイドライン作成。募集を5年ごと、10年を最大任期に
美術家情報整理ボランティア（DMを整理するボランティア）が誕生。
ギャラリーガイドボランティア、新聞情報ボランティア、
図書整理ボランティアと合わせて4グループに。

2014年 新規ボランティアの募集

初めて「10年任期」を迎えるボランティア／ガイドラインの全面改定



美術家情報整理ボランティア

グループの垣根を超えたボランティア活動
ファミリーDAYでのワークショップスタッフとしての活動



絵からとびだす物語



ミニミニワークショップ

他にもボランティア総会やボランティア交流会など・・・

現代における ミュージアムボランティアとは？

ボランティアは無料のスタッフ（安価な労働力）ではない。
自ら学び、地域を良い方向に変えていく「市民活動」

ミュージアム側からではなく、ボランティア側から見てみると・・・

コミュニケーションの場、コミュニティとしての
「ボランティア」

福岡市美術館ボランティア活動 目的の変化

1976年「福岡市民の社会奉仕の意識および芸術に関する一般教養を高め」るため

2004年 美術館ボランティアの活動目的は、美術館の活動を支援し、且つ、自らのスキルを社会に還元することです。

2010年 福岡市美術館ボランティアの活動目的は、美術館の活動を支援し、且つそれを通して社会に貢献することです。

2014年 福岡市美術館ボランティアの活動目的は下記の3点である

- ・美術館および美術館利用者の活動を支援すること。
- ・美術館での経験をもとに、地域の文化活動に貢献すること
- ・ボランティア活動を通して自ら学び、成長する喜びを知ること

ボランティアOB会の設置

10年の任期を終えてボランティアを退会されたボランティアさんは、OB会に入ることができる。

OB会「FAMUSE」の会員になると

- ・年に1回のボランティア交流会に出席できる
- ・美術館のコレクション展に無料で入れる。
- ・・・などの特典がある。

→美術館に来てもらえる口実に

「ボランティア」の特徴

自発性・公共性・無償性（非職業性）

利他性・継続性

非自覚的活動～恋愛に似てる？自己表現？

先駆的活動・先駆性（なくなる活動）

活動の動機の多様性・活動の意味の多様性

自発性は揮発性？

伊丹市昆虫館とボランティア

ー自然史系 / 小規模博物館の現場からー

坂本 昇 (伊丹市昆虫館)

Itami City Museum of Insects and volunteer staff

ー Reports from natural history museums and small museums in the field ー

SAKAMOTO noboru (Itami City Museum of Insects)

令和5年度古代体験研究フォーラム
20240317

伊丹市昆虫館とボランティア

自然史系 / 小規模博物館の現場から

伊丹市昆虫館 坂本 昇 (学芸員 / 館長)



自己紹介



↑シダクロスズメバチの巣を
掘り出して喜ぶ

- ◎ こどもの頃 虫とり、飼育、工作好き
- ↓
- ◎ 学生時代 教育学部 技術専攻
博物館課程で学芸員を知り、
美術館WSボランティアをして学芸員をめざす
- ↓
- ◎ 就職 伊丹市昆虫館 (市外郭団体) に採用
学芸員として飼育栽培展示事務等 何でも担当
- ↓
- ◎ 2016-2018年 市生涯学習センター・
図書館分館に異動 (昆虫館も兼務)
- ↓
- ◎ 2022年 館長に
- ↓
- ◎ 興味がある分野
博物館教育、博物館展示、
昆虫食文化、秋の鳴く虫

本日の内容

- ◎ 伊丹市昆虫館の紹介
- ◎ ボランティアばい活動
- ◎ 特別展のフロアスタッフ (ボランティア)

【おことわり】伊丹市昆虫館では現在、
組織だったボランティアの受入れはしていません。
ご了承ください。

伊丹市昆虫館の紹介



- ◎ 1990年開館
- ◎ 伊丹市立 (指定管理者が運営)
- ◎ 博物館相当施設 (登録がなおります)
- ◎ 学芸職員6名 (館長含む)

伊丹市昆虫館の紹介



- ◎ 自然のなかでも「昆虫」を主に扱う1テーマ型博物館
- ◎ 生きた昆虫を扱っている、動物園要素のある博物館
- ◎ 衛星都市にある比較的小規模の博物館

教育系の活動



学校の授業への出講

トークショー

放チョウ体験

野外観察会

ショップ

常設展示



チョウ温室

拡大ジオラマ展示

昆虫標本

さまざまな生きた昆虫

学習室

地域での活動



市街地での地域連携事業「鳴く虫と郷町」

地域自然系団体への協力

商業施設での出張展示

郵便局・図書館との「身近な自然絵はがき」

特別展

夏休みを中心に開催。
体験型展示多め

企画展

個性的なテーマや
伊丹の自然を紹介



伊丹市昆虫館での ボランティアぽい活動

- ◎ ボランティアと銘打ってなくても、
いろんな形で博物館の事業に貢献している人はいる
- ◎ それらの人々の存在で、博物館は成り
立っている

自然史系分野でのアマチュア

- ◎ 自然系の研究は、アマチュアの研究者や市民グループの存在に支えられている
- ◎ 博物館は、支えてもらうことも、支援することもある関係



↑旅をするチョウ、アサギマダラの移動を調べている「アサギマダラの会」。大阪市立自然史博物館のサークルが始まり（写真は会報）



↑日本顕微（りんし）学会では、会員の約半分がアマチュア研究者

友の会 運営委員会



会員の運営委員と館学芸職員が協力して運営している

14

昆陽池公園 観察・調査会

- ◎ 館の立地する昆陽池公園での定期昆虫調査
- ◎ 2004年から月に1回、夜間または日中に実施
- ◎ 館の学芸職員だけでなく、アマチュアの専門家や他館の学芸員も参加している
- ◎ 交流や学び合いの場としても機能している



調査のようす

友の会 会員が講師にもなる



友の会行事では、アマチュア専門家の会員が講師を務めることもある

伊丹市昆虫館友の会



2004年創立。館と協力して独自の事業を開催している

13

鳴く虫と郷町（なくむし と ごうちょう）



江戸時代の建物での鳴く虫展示

- ◎ 江戸時代の「虫聴き」をアレンジした事業
- ◎ 9月の約10日間、中心市街地+各所で開催
- ◎ 15種3,000匹の鳴く虫展示と多彩なイベント
- ◎ 地域のさまざまな事業者やグループと連携



喫茶店での鳴く虫との共演ライブ



商店での鳴く虫展示

鳴く虫と郷町：展示昆虫の準備をイベント化

みんなでつくる、年間を通じた事業に



スズムシ里親プロジェクト



キリギリスハンター



鈴虫のケースづくりの会

特別展のフロアスタッフ

- ◎ 1999年夏 体験型展示を多用した特別展開催
- ◎ 来館者の体験型展示のサポートのためにフロアスタッフを導入
- ◎ 博物館実習生とボランティアで構成
- ◎ 評判がよく、以降の夏の定番に
- ◎ コロナ禍前の2019年まで活動



研究報告への投稿

- ◎ 昆虫や博物館に関する報告なら誰でも投稿できる
- ◎ 地域の生き物の分布や生態などの報告は、地域の自然情報蓄積への貢献となっている



- はアマチュアの人が筆頭著者の、地域の生き物の報告
- はアマチュアの人が調査の主要メンバーの報告

フロアスタッフ（ボランティア）の概要

- ・ **活動期間：**特別展期間（およそ7月下旬から8月末）
* 期間終了後解散
- ・ **募集：**市の広報誌および前年参加者に個別連絡
- ・ **人数：**毎年10名前後
- ・ **報酬：**なし
- ・ **保険：**館予算でボランティア保険に加入



エプロンをしている人がフロアスタッフ

伊丹市昆虫館でのボランティアばい活動

- ◎ ボランティアと位置づけていないが、人々の参加が調査研究や行事の充実に貢献している
- ◎ 長期的な参加、数時間のお手伝い、専門的知識の要不要などさまざまなスタイルがある
- ◎ 参加によって、楽しみや学びになると共に、貢献していることにやりがいや社会との接点を感じてくださっている人もいる

フロアスタッフって何する人？（ここから研修スライドの抜粋）



- 体験型展示のつかいかた、ふれ方などの支援
- お客さまとの交流
- 展示室の維持管理
- お客さまへの案内、安全管理

展示室は、けっこう賑わいます



みまもるのも大事なことです（安全の確保の面でも）



「あっ、おった!」「どこにおんねやろ..?」 あいさつし、交流します



部屋をすごしやすくキレイに保つことで、 お客さまも落ち着きます（研修スライドここまで）



いっしょに話すけど、話してもらうことも大切にしています



研修会は事前に1回



部屋がないので準備中の展示室で開催
博物館実習生や教員初任者研修生と共同

活動は展示昆虫のチェックと飼育、清掃から



運営に必要な作業でもあり、昆虫の生活や扱いを知る機会でもある

伊丹市昆虫館でのフロアスタッフボランティア

- ◎ 来館者の満足度向上、安全管理、展示評価など多くの面で、ありがたい存在
- ◎ ボランティアルームなどの場所の不足、業務量の問題などで、期間も内容も限定して実施してきた
- ◎ コロナ禍による展示内容の変更や働き方改革の流れもあり、まだ再開していない
- ◎ フロアスタッフでなくとも人々に博物館の事業に参加してもらう活動はあるので、この活動だけにこだわっていない面もある

開館前、閉館後のミーティング

ノウハウなどの共有や展示改善の提案、実施も

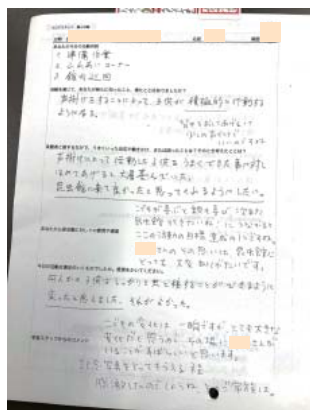


閉館後のミーティングのようす

さいごに、僕の考える博物館でのボランティアさんのこと

- ◎ ボランティア参加者に期待すること
 - 居場所のひとつとして（交流、博物館などが）好きになってほしい
 - 活動して、やりがいを得てほしい
- ◎ 博物館として
 - 講座や友の会とはまた違う、教育系の活動
 - 規模の大きな / 充実した活動やお客様の満足度を高めることができる
 - 職員の手を減らすものとは考えていない
 - ボランティアと職員、お互いの尊重と感謝が大切

コミュニケーションのための個人日誌



- ◎ 活動日には、任意で日誌を書いてもらっている
- ◎ 次の活動日までに学芸職員がコメントを記入
- ◎ コミュニケーションや研修の補足として大切にしている

←ある日の日誌の例（コピー）

以上、 伊丹市昆虫館とボランティアの お話でした

ありがとうございました

ご感想など何かありましたら、

sakamoto@itakon.com

までお願いします

「ミュージアムとボランティア」

※ 当日のライブ感を活かすため、文字起こしに際して、発表者校正を除き、用語統一等をあえて行っていない箇所がある。

永恵…これから始めます。我々実はこれまでも事前の打ち合わせというの2回やっています。当然事前打合せの発表を受けた中で、本日の発表はバージョンアップをしています。バージョンアップしたものは今日初めて見ているという状態になります。ですので、自分の発表の中で、これは言っておきたい、言っておけばよかったとか、逆に説明しなかったなとかっていう点が補足でありましたら、トークセッションに先駆けてご説明をいただきたいです。

私が口火を切る関係上、発表の中で触れてなかったところを2点お話をしようと思います。1点目は、ボランティアさんとのコミュニケーションや連絡のところ。発表の中では、コミュニケーションの点で、日常的に会っているんだ・同じ部屋にいるんだって話と、あとグルーブの例会があるんだって話をしました。それ以外にも月に1回、ボランティアさん向けの連絡をメールでしています。メール普及以前には、お手紙をボランティアさんに送っています。月に1回はやりとりをしているというふうな形を連絡としてとっています。日常的なミーティング、或いは各グルーブの例会に加えて、月に1回のメールや手紙の連絡をしているというのが、公式かつ定期的な連絡です。もう1点は設置要綱です。当館も、ボランティアさんを養成していく中で、ガイドラインではないですが、設置要綱というのを定めています。ボランティアとはどういうもので、どういう活動をするのか目的は何なのかとか、こういうことをしてもらおうのかっていうふうなことを定めたものを館の中で作って、それに基づいて活動をしていま

す。ですので、当館も、一応ボランティアさんにあつては設置要綱を作って、それに基づいて、ボランティア活動を行っているというのが補足の2点目です。

発表の順番でいきましょうか。萱原さんは何かありますか。

萱原…萱原です。うちも今、永恵さんがおっしゃったように、当館では内規で、学習支援交流員の規約というものがありません。それぞれの年、何回か規約の改正を行っています。必要に応じて内容を増やしたり、ちよつと調整しながら、行っております。アドバイザーさんの制度も、この規約にきちんと2014年ごろに規新しく改正として入れている状況なので、外に出すものではない内規なんですけども、当館の方もそういったものを定めております。

あと、登録とか事務系の話なんですけども、当館は他の博物館の方に比べて、ボランティアの人数がちよつと少ないですけども、それは募集時に定員を設けておりまして、大体10名程度ということで、募集をかけております。鬼本さんとか他の方のように、募集したら何十人と来たっていうことは、あるんですけども、定員設けているので、書類選考だったりとか、そういうことをして調整しながら、今の人数になっています。とりあえず、思いつく限りでは以上です。ありがとうございます。

永恵…次、鬼本さん何かございますか。

鬼本…たぶん福岡市美術館のボランティアさんが、いま何人ぐらい活動しているかっていうのを忘れてたんじゃないかなと思います。福岡市美では、いま120人ぐらいがボランティアとして活動しています。やっぱり地域によって、すごい状況も違うのかなっていうのと、館種によってもすごいボランティアさんとの関わりって違うのかなっていうのが、今回お話ししてわかったので、何か補足っていう意味も、そういうこともここで話し合えたらなと。思います。

永恵…ありがとうございます。坂本さん、終わらたてですが、いかががでしょうか。

坂本…終わらたてなので、あんまりないといえませんが。

ちよつと補足するとすれば、鬼本さんのお話の中で、友の会からボランティアさんが生まれたという話があつて、それが興味深かったですね。最初の頃は友の会の会員さんじゃないとボランティアできなかったことが言われていたんですけど、伊丹市昆虫館の場合には、友の会ができる前からボランティアをやつていて、ボランティアに来ていた人達の一部の人が、友の会発足時に主要メンバーになったという経緯があります。これはたまたま時系列の問題かもしれないんですけども、面白いなと思って聞いていました。

永恵…ありがとうございます。ちなみに当館には友の会はないんです。ボランティア一本でやっているのが、うちの館ですね。歴史系だと兵庫県立歴史博物館さんは友の会があるんですが、当館は開館以来設けていません。



ボランティア活動にかかる費用



では、トークセッションを進めていきます。まずは、わかりやすい質問でいきますと、ボランティアさんは無償で活動を行つて、いるかというのがあります。たぶん、これは、ボランティアさんの活動のみだけではなくて、ボランティア保険以外のところも含むのかなと思うんですけど、その辺りってどんなことされてますかね。ボランティアの報酬はないと思うんですけど、その活動の中で必要な経費についてところになってくるかなと思うんです。

当館はボランティアの活動が、何かイベントに紐づいたりすることが多いので、たとえば古代体験講座や、募集型の講座は、また別であるんですが、基本的にはその館で活動する内容については旅費も、館でお金の負担をしています。結果的に活動に繋がってる枝葉のお金はあるんですけど、ボランティア活動そのものには、ボランティア保険500円しか掛けてないというのが現状です。その辺はちよつ

と当然当館の場合には県域全部が動きの対象になってくるので、なかなか各市とかでは動きがまた変わってくるかと思うんですけども。或いはその団体の館種ごとに違うとは思いますが、萱原さんどうでしょうか。

萱原…当館の方も考古博さんと同じように、ボランティア保険に加入する場合は館からお金を出しています。支払いの加入事務と支払いを館でしています。あとはボランティアさんの活動に対しては、館内での活動であつたり、館外のワークショップにかかるもので、当館のボランティアさん用の予算から出します。なので、交通費という話になりますと、交通費の支給はないです。なので、どこか外部でイベントするときは、来てもらうボランティアさんの交通費も考えて、参加する場所を選別することはあります。そのワークショップにかかるお金と、保険等ぐらいしか、当館でもそういうお金の動きはないですね。

永恵…ありがとうございます。鬼本さんいかがでしょうか。

鬼本…ボランティア保険はいずれの館の場合でも、美術館の方が予算を用意して掛けているという状況です。大原美は私立なので、いろいろと状況が違ふんですけども、福岡市美と姫路市美については、どちらも研修講師を呼ぶための予算ついているのがついてはいたはずですが、それになんかちよつと誰か呼んだりということができるよう予算がついています。

あと、福岡市美については、お茶代がついています。ボランティアでお茶飲んで、そのお茶代ついているのも、確かついていました。でも結局、ボランティアさんが自分たちで持つてきて、好きなものんだり食べたりして、あんまり、こうずつとお茶の袋が消費されずに残っているっていうようなことがあります。

永恵…お茶代ですか。これは面白いかもしれない。

鬼本…そう。それとね、コピー代とかはちよつとついています。講師呼んだ時のためだと思うんですけども。コピー代みたいなのは、消耗品費を少しついていたと思います、これ福岡の方です。

永恵…コピー代や研修の講師代とかがついているのは、ボランティアさんの何か講座とかのための予算についてになりますか？

鬼本…そうですね、それだけのためにしています。でも、結局5年に一回しか呼ばない、毎年研修しないんで。研修の時に使っている、感じでしたね。

永恵…ありがとうございます。伊丹市昆虫館さんは、スポットボランティアですけれど、坂本さん、どうでしょうか。

坂本…フロアスタッフのボランティアについては、予算はボランティア保険しかついていないので、その支出しかしていません。それ以外にボランティアっぽいものをやっているとかがあったけど、フロアスタッフ以外にも個別のボランティアを受けいれたことがあったりしました。詳しくは覚えてないんですが、交通費程度の謝金を出すことはしたことがあったとは思いますが。でもそれは、個別案件としてそれぞれその時に相談して決めた感じですよ。

永恵…ありがとうございます。皆様のお話聞いてますと、ボランティア保険は活動の中で当然必要なので掛けている。あとは、場合によっては、研修の講師であったりとか、コピー代の負担をすることもあるというのが結論かなと思います。



ボランティアの任期



永恵…さて、皆様チャットで質問いただきながら、どんどん進めても行きたいと思います。早速チャットに書き込みがありました。岡山県立美術館様の橘さんからです。「萱原様と鬼本様、ボランティアの任期を定めている理由を教えてくださいませんか？」という内容です。発表の中で、質問にも触れているところもありました。

当館の場合は、任期を定めてないので、ボランティアさんご自身のご意思で辞められるまで続けるという形になります。任期の有無や任期制のメリットデメリットについて教えてくださいという質問ですが、

萱原さん、いかがでしょうか。

萱原…ご質問ありがとうございます。

任期についてなんですけど、ご質問にある、ボランティアの任期を定めている理由を調べたんですけど、お答えできる答えが今ないので、わかりません。

定年制とか任期があるメリットデメリットなんなんですけども、メリットとしては一定の活動のやる気というか、活動の目安に1つなるかなってというのがあります。あとは、辞めるタイミングもそうですし、当館としては人数が一定以上増えないっていうところはメリットとしてあるかなと思います。デメリットは、発表の中でもお伝えしたんですが、技術継承ですね。それが途切れるかなっていう問題点があったりします。あとは、意欲がある人や、もっとやりたい・こんなことやりたいって考えてる人が辞めざるをえないのが、やはりデメリットとしてあると思います。

デメリットに対して当館では、アドバイザー制度という定年延長システムですね。館から依頼して了承を得たら、更新研修受けてもらってアドバイザーになってもらうというシステムです。

ただし、これもやはり善し悪しがありまして、少し話の筋からずれてアドバイザー制度の話になってしまいうんですけども、現状ではアドバイザーさんが交流員さんより人数がちよっと多いっていう状況もあるんで、博物館側の適切なマネジメントが必要なんです。ボランティアの定年制のデメリットを補うはずのシステムが、ちよっと博物館の足を引っ張るじゃないですけど、問題点として出てきているという、任期制に伴う問題もあります。あまりお答えにはなっていないかもしれないんですけども、当館の考える任期のシステムとメリットデメリットは以上になります。

永恵…ありがとうございます。打ち合わせをしたときにも、アドバイザーさんの数が、比率的に多いよねっていうことは、話になりました。神戸市博さんでいろいろご事情があつて、そういうことになっているん

だろうなっていうのは薄々感じてたところではあります。いずれにせよ、活動の目安、必要な人数に対してどうするのかっていう観点で動いているから、人数制限や任期の年限っていうのがあるのかなっていうのが、萱原さんが言ってくれました。

鬼本さん、いかがでしょうか。

鬼本…正確に言うとは任期を設けてるのは、福岡市美術館だけです。姫路市美もないし、大原も特に任期をどうするかっていうのを、うやむやの内に私が辞めてしまったような気がするので、ちょっと今どうなってるかわからないんです。少なくとも当初はなかったはずですよ。

定年制のメリットやデメリットっていう時に、「それは誰のメリット、デメリットなの？」っていう問題、というか課題もあると思うんですよ。館にとってなのか、ボランティアさんにとってなのか、というのを、よくよく考えないといけないと思います。福岡市美術館の場合は、ボランティアさんの方から、「任期設けてください」と進言がありました。ボランティアやる人たちには、いろんな人がいるんですけど、すごい真面目な人も結構多くて、「任期がないと辞めづらい」と言われたんですよ。それこそ、ボランティアさんの中には、すごい難病になっちゃってるのに、美術館にやってきちゃったりする人もいます。「いやちよつと病氣なんだから、そこまで来なくて大丈夫ですよ」と言ったら、「もうちよつと任期ないとやめづらいんだよね」とか言われて。それで、2004年に募集するときに、やっぱり任期を設けたほうがいいかなってなりました。でもやっぱ10年とか10年って短いんですね。10年だったら社会も変わってるし、本人の状況も変わることが結構あるので、10年にしました。ただし、10年経っても、「まだまだボランティア続けたいわ」という人は、再応募できます。ほぼフリーパスなんですけど、面接とかは。福岡市美は面接して、さよならっていうこともあるんですけども。再応募の方は、ほぼ面談のみっていう状態で面談してます。ただし、研修はあります。新人研修って10回あるんですけども、そのうち必修科目っていうの

を作ってて、それを受講しないといけないっていう条件はつきます。永恵…ありがとうございます。

任期って難しいですよ。鬼本さんの話であれば福岡市美では、任期を定めた理由は、ボランティアさん自身からの任期を定めて欲しいという、依頼というか願いの中から進めてきたっていうところがある。ただ、10年経った時の再任って言いましょかね。何かこう言うとか何かお役所言葉みたいになっちゃうんですが、再任を妨げるものではないっていうものですね。

当館では任期を定めてないっていう話をしましたが、うちの場合には、もともとの制度的なところが地域のリーダー、っていうのもあります。考古学者さんになって、地域のリーダーとして、どんな歴史文化遺産、要するに文化財の活用とか保存もしていただきたいっていうのがあるので、任期をおそらく定めてないんだろなと思っております。そのため、一番上の方で86歳、下は18歳までが同居しているというのが、当館の現状です。橘さん、これで質問への回答になってますかね。

ご視聴の皆様、今日のトークセッションは、こういう感じで進みますので、ぜひ活発にチャットに入れていただきたいです。



ボランティアへの研修の頻度や時間数



今ちょうど任期とかの話とか、あるいは採用の話が出てきたと思いますが。頂いた質問の中にですね、活動に関する研修の頻度とか時間数をどうされていますか、という質問があります。これはおそらく館内での活動を進めていく中でのもうボランティアになられる方に対する研修なのかなというふうに思うんですが、今日の発表では、養成研修的な話はあったかなと思うんですけど、その他のボランティアさん向けの研修について、開催の有無や頻度を聞きたいなと思います。まず制度的なところでまずいきたいと思います。

当館の場合ですと、スキルアップセミナーという形で普段やっております。このスキルアップセミナーは、もともと養成研修の一環だったんです。ここが話がややこしいんですが、当館のボランティアである考古学者って、博物館が無い時代の考古学者養成研修でずっと養成してきていました。博物館ができた時に、途中で館ボランティアという、考古学者よりも、ライトな感じのボランティアを養成するっていうのも構想にあったようなんです。資料を調べていくと、考古学者養成研修の中のうち、いくつかを受けなきゃいけないものを受けて、なおかつスキルアップ受ける形だったと思うんです。それが研修としては、いまでは2つに分かれてしまっています。スキルアップセミナーはボランティアになった後で、より知っていただきたい詳しい考古学の話とかを内容にしています。

つい、一昨日も、当課の課長が東播磨地域の須恵器生産の話をしたりと、私が専門のお城の話とかGISの話とかもしたんですけど、そういったがつり専門の話をすることもあります。また外部講師を呼ぶこともあります。近年はお招きしていませんが、博物館の教育普及で有名な、染川香澄さんをお呼びしたりとかもして、バージョンアップを図っていくのをしています。また、昨日のボランティア総会があつて、その場で話があつたんですが、学校団体が4月にいらっしゃることを踏まえて、団体対応のやりかたを改めて確認するような研修を「したい、して欲しい」し、「やるぞ、やりたいぞ」っていう意見も、ボランティアさん側の方からいただきました。研修として計画をしているところです。そういった形で、求めに応じてるのは当然でございますし、それに加えて、館としても年に1回2回は確実にバージョンアップといひましようかね。考古学の専門的な話あれば、来館者対応とか活動の内容について、当館では、スキルアップという形で研修をしているというのが、今ですね。スキルアップセミナーの時間も1コマ、長くて90分、短かったら60分ぐらいでやっているというところ。ほか皆様どうですかね。

鬼本…3つの美術館の話なので、本当それぞれなんです。

姫路市立美術館について言うと、各グループに担当学芸員がついてるってお伝えしたと思うんですが、その学芸員がレクチャーしたりとかいうのはしています。企画展とか、コレクション展示変えたときには、必ずレクチャーをやるっていうのやっています。この間なんかボランティアさんが事務室にやってきて、その担当学芸員に「他のグループもやってるから研修してよ」みたいな意見や「レクチャーしてよ」みたいなことを言ってたって私聞いて、「何だつて！よしよし！」みたいな気持ちになりました。こうやって担当者が成長すると思っています。

大原美術館について言うと、これもだいぶん、記憶がおぼろなんですけれども、やっぱり館が関連する大きいイベントとかがそこそこあるので、その前に何かこうみんな集まって「こういうことしましょう」みたいなことは、お話ししたりはしてました。

福岡市美は本当にグループではつきりと活動が分かれているので、ボランティアについて言うと、夏の子供向けのギャラリートークとかしてもらったりするので、その時に研修をしたりですか。それから、やっぱり何年かに1回、ちよつとリカレントじゃないんですけれども、ガイドの仕方や、そもそものこのガイドの目的って何でしょうかみたいなことは、レクチャーとしてやっています。

永恵…ガイドに関する研修の話は、我々の昨日の総会の中で出てきましたね。昔の解説と今の解説では、解説のあり方がずれてきてるじゃないかっていうふうな、ヒートアップする方がいました。いろんな事情があつて今の形にはなっているんですが、昔と違っているんです、おそらくそのリカレントというか、学び直して大変ですよ。活動をやっていく中で、バージョンアップする、或いは基本に立ち返るっていうのは必要になってくるし、あつた方がいいのかなっていうところはあります。神戸市さんはどうですか。

菅原…研修についてですが、先ほどもお話にあつた通り、現役生向けには

研修っていう名目で、更新研修が2回あります。スキルアップという面では、交流員さんの方からワークショップについて、例えば、このワークショップに向けてこういう勉強がしたい・浮世絵について勉強したい・銅鐸について勉強したいっていうお声があったときに、担当学芸員が、館内の専門の学芸員と調整をしながら、年最低一回は、学芸員とか指導主事が講師となる勉強会はしています。多い年で4回ぐらいはしていたとは聞いています。あとは博物館としてのイベント講座ですね。そういったときに補助として、何名か来ていただくことがあるんですけども、そのときの講座を聞いてもらうのも、一つの勉強やスキルアップになってるかなっていうふうにも思います。

あとは現役の方向けとなると、交流員さん同士でのワークショップのスキルアップ会・勉強会を、それぞれの声かけ人の方がいらっしゃって、それぞれ「来週こんな勉強会しますよ、ちよつとこのワークショップのスキルアップ会しますよ」っていうのも、やっています。最近だと、来月から新しい方が入ってこられることもあって、定期的に行っている、居留ツアーっていうワークショップがあるんですけども、お客様のちよつと入れてのツアーは一旦、来月はお休みして、実際に交流員さん同士、新しい人も含めて現役の方アドバイザーも含めて、実際に現地、館外に行つて勉強会とかを実施しますし、お互いに「もつとここはこういうしゃべり方にしたほうがいいんじゃないか」っていうことをやってみようみたいな話をして、実際に来月ちよつとやつてもらったりっていうのはあります。

永恵…坂本さんいかがでしょうか。

坂本…僕のやってきたフロアスタッフは、ずっといるボランティアじゃないので、若干絡みづらい質問です。博物館実習の学生さんも一緒にフロアスタッフに入っていたという話をしましたけど、年によつては、実習生の方はフロアスタッフもしながら、館の別の業務の実習、例えば収蔵庫の案内とか、飼育を少し展示室以外でも手伝ってもらうとか、野外に昆虫を捕りに行くとか。そういうことをするこ

とがあります。その時に可能だったら、ボランティアさんも一緒にやつてもらいたいなことは、割と臨機応変にしていました。でもその時、その日に来ていた人だけになるんですけどね。全然組織立ってないんですけど、「ちよつと私も飼育したい」という感じの話が出たら、「ほなやるか」と言つて一緒にやるみたいない感じですね。そういう感じでちよつとやるみたいないことはやっていました。あと、さつき研修は1回と言いましたが、ごくたまに2回やっている年があつて、その時には休館日に集まってもらつて、自分たちのフロアスタッフとしてのノウハウを言い合つて、まとめて発表するっていう内容もやっていたんですけど、結構盛り上がりましたね。そんなことをやっていました。

永恵…ありがとうございます。いや、よく考えれば当館でも、講座のようなイベントに際して、しっかりと部屋も決まっていって、講座をやっている、あるいは募集型の講座をやっているって言いましたが、それに加えて、去年のフォーラムにご参加の方はたぶんご説明をしたと思うんですが、『週末の古代体験』というのやつておりまして、館内で突然開始するイベントあります。これは、最終的に何か館のプログラムにしていこうと思つているものを、お試しする場所であつたりするんです。来館者さんがいらつしやなくて、館内がガラガラするときもあるんですけど、そういう時にもボランティアさんが「なにしてんの？手伝うで」って言つて、体験ブースに寄つてくれて、手伝つてくれることがあります。そのときに、研修ではないんですが、『週末の古代体験』の内容について、「こんなことがあつてこんなものがあつてこんなことするんだよ」、「じゃあ手伝うから詳しく教えてね」「いいよ」っていうふうなコミュニケーションは、普段からとっているかなあというところです。

3館の話からは、他館の皆さん等しく、ボランティアさんの求めに応じて、普段ボランティアさんに対する活動に関する研修をされているというのが、大きなまとめになるのかなと今思いました。



ボランティアの年齢構成



永恵…今、リアルチャットが届きました。実際に、会場内から本物の紙が届いたんですが、坂本さんの話の中で、ボランティアさんに学生さんがいる、または博物館実習の学生がボランティアにいるって話があったと思うんですけど、年齢構成として、各館の皆さんどうですか、若い方っていられていますか。若い学生さんとか、60歳以下も含めてですが、若い方がどれぐらい、いらっしやるのかなあというのが、気にはなっています。当館ですと、学生さんの登録は10名近くかな。最近はこちらと増えてはきています。坂本さんにいかがでしょうか。

坂本…記憶で言うんですが、基本的にはシニア世代、60〜70代ぐらいの人が多かったです。中には現役世代の人もしゃっていました。例えばこれまで来た人では、40〜50代ぐらいで昆虫にかんする仕事をしておられる人だったり、もしくは学校の先生で、虫のことを覚えたっていうことで来られたりということがありました。

永恵…理科の先生ですか。

坂本…小学校の先生でしたね。理科に強い先生だったんですけど。あと、若い人でも何例かあって、虫が好きで、せっかくだから昆虫館で活動したいって言うてこられる20代ぐらいの方が、何人か入ってきたことがありました。あとは友の会とか館の行事に子供の頃に來ていて、館のスタッフと顔見知りというお子さんが大学生ぐらいになって、フロアスタッフとして来るという例もありました。うちのボランティアって毎年募集して毎年解散するんですけど、前年の人には募集の案内をするので、来る人は何年も来るんですよ。10年以上来ている人もいます。結構定着率は良くて、何年も続けて参加するっていうのは若い人でもありました。

永恵…短期間なんだけど、来てくれた時にお声掛けをするから継続して続いていてるっていうところがあるということですね。鬼本さんいかがですか。

鬼本…見た目が若いなって人も、結構います。実はですね、ボランティアさんの年齢って幾つか、みんな知らないんですよ。

永恵…え？

鬼本…聞いてないです、年齢。姫路は聞いてるのかな。福岡市美は少なくとも年齢・性別を聞かないことにします。

永恵…年齢も性別もですか？

鬼本…聞いてないと思います。年齢はもう募集要項から外したっていうことがあって、別に何歳でもできるんだったらいいんじゃないっていう考えで、一応年齢の下限の方は、確か決めてまして。姫路も福岡も18歳以上っていうふうに、確か年限をしたらと思います。上の方の年齢は知らないです。みんなに何歳かわかんないです。

永恵…それはたぶん、どの館もそうかな、聞くのが怖いってのもあるかと思えますけど。

鬼本…何かねえ、本当幾つかわかんない人が何人もいます。年齢を聞いてみて驚くっていうことは、あります。あんまり若い人かどうかっていうのをそんなに気にしてないです。いたらいなと思いますけれども。やっぱり、年齢でどうこうっていうことはないかなと思ってますね。大学生もいましたし。いたんだけど最近見ないなっていう感じがな。

永恵…当館も大学生のボランティアさん結構いらっしやるんですけど、やっぱり大学生さんの場合には就職をしたときに、うちに実際通えなくなっちゃう人もいて、結果的に登録をやめてしまったり人もいます。一方で、ご出身が兵庫県内で、さらに県内企業に勤められて、まだいらっしやるってパターンもあつたりとかで、様々なんです。様々なんですけど、若い方を年齢を基準として分けてしまうと、少なめ目ではあるんですけど、逆に福岡市美さんではそもそも聞いていない。したい人が来てください、っていうことですよ。

鬼本…18歳以上ということしか言ってないんで。

永恵…ありがとうございます。萱原さんいかがでしょうか。

萱原…うちは年齢は、登録票更新時に登録票っていうものを出してもらってますけど。そん時に、お聞きはしてますし、交流員さん自身も、何か年齢は気にされています。「定年ってあるんですか」って聞かれたりして、「うちはないですよ、もう80でも90でもいつでも、お元氣なら100歳まで活動してもいいですよ」っていうのを、このあいだ話したばかりです。

年齢の割合としては大体60歳から70歳の方々が中心となって、前後で50歳代の人と最高齢の80歳、80ちよつと行ってる方がいらつしゃるっていう状況で、若い人が本当に全然いないです。去年や一昨年までは大学院生がいたんですけども、先ほどお話にもありました通り、就職を機に離れるから辞めますっていうふうなことで辞めていかれました。なので、本当にうちはもう、シニア世代しかないっていう状況ですね。昔の状況は、わからないんですけども、現状としては、そのような感じです。



大学生のボランティアの活動や継続性



萱原…あと、うちも横から、リアルチャットが飛んできました。いま別の担当者もが隣にいますけども、うちにも、時々大学生さんからボランティア18歳以上してるので、申し込んできてくれるんですけども、結局内情を見るとほとんど活動に参加してない、登録してないっていう状況なんです。申し込んでくれたけど、研修受けてるうちに消えちゃったっていうパターンなんです。他の館では、学生さんに何をしてもらってるかとか、学生さんだからこんなことを、やってもらってる・こんなことができるみたいなこと、どんな感じで学生さんに参加してもらってるのかな、っていうのを聞きながら思ったんですけども、何かありますか。

永恵…当館では、特に学生さんだからといって、何か特別なことをしてもらっている、ていうのはないです。通常の活動の中で対応してもらっ

てますね。必要に応じて人生相談を受けたりはしますよ。「考古学の道に進む場合にはどうしましょうか」とか、「土器の実測教えてください」とか、そういうのはありますけど、ボランティアとして、どうこうってなると特に意識をしてないかなあ。今も学生の子がいるから特にないですね、これといって。

萱原…ありがとうございます。

永恵…大学生のボランティアが続かないっていうのは、事実だと思います。学生さんが、これから経験する人生のライフイベントがすごいおっきいのでやむを得ないかと思っています。一方で、ボランティアとして定着してくれば、これからまだいろんなライフイベントの中で、当然きつかけはあるだろうけれども、ずっとボランティアでいてくれているという意味では、博物館にとってはありがたいです。他に今の萱原さんのリアルチャットの方の質問で何かありますでしょうか。

鬼本…全く違うグループを大原美術館は作ってます。ジュニアアテンダントって言って、高校生と大学生の、ボランティアっていうより、ほとんどインターンみたいな感じなんです。無償のインターンみたいな感じなんです。最終的な目的が、「自分たちで企画を立てる」っていうところまで持っていくっていうものです。もう本当職業訓練ですよ。それをやりやっています。

永恵…企画って何の企画ですか？展示の企画ですか？

鬼本…ワークショップ企画です。福岡市美でも実はやって、いまはだいぶ縮小しましたが、福岡市美術館では夏休みに学生ボランティアにギャラリートークをしてもらうっていうことをずっとやってたんです。今はファミリーデーっていう大きなイベントがあるんですが、中心は福岡教育大学の学生さんなんですけれども、近隣の学生さんに、ボランティアスタッフとして来てもらうってことをしています。それは1回だけ研修というか、事前説明会っていうのをして、当日きてもらうっています。学生さんやっぱりその生活スタイルが違ってたりとかするんで。あとライフスタイルが変わるイベントがいっぱ

いるから、別に設けてるっていう感じです。ちょっと面白いのが、そういうボランティアを卒業した人と今仕事してるみたいな。ちょっと教育普及の専門の学芸員としては嬉しい。

萱原…すごいですね。

永恵…坂本さんいかがですか。

坂本…うちもそんなにないですが、先ほど言い忘れていた事がありました。当館では、中学生の人にフロアスタッフに入ってもらったことがあります。フロアスタッフと言っても、夏の特別展ではなくて別の小規模な展示です。虫とのふれあい体験というのをやってもらったことがあります。その時に友の会に参加している兄弟が「スタッフやりたい。」と言って来られたことがありました。それで、入ってもらおうということをしました。もちろんお客さんに接するときには、他のボランティアさんがついたりして、見守るような形にはしたんですけれども、トラブルが起きるといこともなく、本人たちも楽しく、お客さまもすごく喜んでいただけのように思っています。それ以外の学生さんでは、フロアスタッフというと、博物館実習で実習をして、面白かったから翌年ボランティアに行きますっていう学生さんは時々いるという例があるのと、個別に希望する話があったりした時に、個別に来てもらうみたいなのをしたことはありません。

先ほどインターンみたいなことでっていう話もありましたけど、インターンまで仰々しくはないんですけども、専門的な知識を持つて人だったら、インターンに近い形で何でもやりましよう的なことで関わってもらえることもあるし、そうじゃなかったらお手伝いみたいな形で受け入れるっていうことは、過去にはしたことがあります。学生じゃないんですが、個別の中には東日本大震災の後に、当館では被災した博物館の標本のレスキューを一部したことがあります。その際には、ぜひ参加させて欲しいと、申し出があり、それで、一定期間のボランティアを受け入れるということをしたりしたこともあります。

永恵…ありがとうございます。インターンというところかにも、話が広

がってきて、ボランティアに限らず、いろんなパターンがあるんだなっていうことや、それらのパターンに当てはまらずに、個別で対応する場合もあるっていうことだと思います。その点でいくと、ボランティアでは厳密にはないんですけど、当館では堅穴住居復元プロジェクトというのがあります。学習支援課が、私もなんですけど、堅穴住居をヨシ刈りをするところから実施して、堅穴住居を復元しているんです。そこに、当館の近隣にあります国立明石高専の学生さんに来ていただいて一緒に作業をしています。一緒にしているっていうのは、確かにボランティアといえばボランティアかなあというふうには思えなくもないです。研修とかがあるわけではありませんし、一緒に作業をしながら、やっている形ですね。ですから、今のご質問については、基本的に何か特定のことやってるわけではない、或いはその形ではないんですけど、来てもらった学生という特性を生かした別個のことをしているとか、個別の対応しているつてのが答えなと思います。そんな感じでよろしいでしょうかね

萱原…ありがとうございます。

永恵…今ですね、年齢の話から、学生の話にもなりましたが、年齢層もたくさんボランティアさんの中にはあるというふうに、聞いています。



ボランティア同士の仲間づくりへの働きかけ



永恵…いま兵庫県立考古博物館の中村さんという方からですね、チャットが入りました。読み上げます。ボランティア活動にとってボランティアさん同士の仲間づくりも重要かと思うのですが、何かそれに対して館として働きかけ、そういう仲間づくりに対して、働きかけをしたりとか、意識されていることはありますかという質問が入りました。これは、コミュニケーションの内容に関わることでですので、事前にいただいている質問の中にも、同じく、人生の先輩が多いと思われるボランティアさんとの円滑な関係を築く秘訣があればという質問があり

ました。質問の内容としては、ボランティアさんと職員の話になってきますけれども、仲間づくり全体の話という点で何かないのか意識されてることや、働きかけをされていますかという質問だと思います。

このことについて、短期ではあったと思うんですが、フロアスタッフさんへの対応という中で、日誌を書かれてたのが、坂本さんのご発表の中にあっただかと思えます。従事する期間が短い期間だけど、何か働きかけというか、何かそれ以外の、あれは職員とフロアスタッフだったかもしれないけど、あれ確かスタッフのみですね、確か。

坂本…朝と夕方のミーティングは、基本的にはスタッフと一緒に過ごさうなので、それが1つのコミュニケーションの時間にはなっています。そういう内容なので、特に仲間作りに対しての働きかけっていうまではないかんです。でも、例えば展示室での活動ですと、一日の中でのシフトを作るんです。休憩時間は順番に交代に取りましようとか、そういう感じでやっていくので、その時に同じ休憩時間になる人とはおしゃべりをよくするとかもあるので、学芸員がシフトを組むときには、できるだけ異なる人と当たるようにするとか、そういう事はしていました。あと、過去のフロアスタッフでは特別展が終わった時には打ち上げをするとか、そういうことでの交流っていうのはありましたね。

永恵…すぐぶっちゃけた話になるんですけど、フロアスタッフ集まってみたものの、すげえ仲悪そうっていうのとかあるんですか？

坂本…そんなにないんですけど、「ちよつとこの人しんどいです」みたいなことを、他のフロアスタッフの人から、言われるっていうことは、なきにしもあらずでした。個人日誌はそういうときに機能したりもします。ミーティングとかではそういう事って言えないじゃないですか。個人日誌であればそういうことがあった場合に個別にやりとりするので、意見を吸い上げるような機能も果たしていました。

永恵…坂本さんの話だと、短期なので、特に意識していることは無いけれども、ミーティングとか、休憩時間に、ボランティア同士が混ざるよ

うにっつてのは配慮している。また、フロアスタッフ同士で、何かあれば個別に支援したり、情報をサルベージしていくっていうことですね。なので、短期間であっても、職員側からアプローチする必要がちよつと出てくるんじゃないかな。そういう点でいきますと、仲間づくりをして進めようと思ったのに、1期生がいなくなっちゃった神戸市博物館さんは、いかがでしょうか。

菅原…1期生が消えた神戸市博です。仲間づくりっていう観点では、館からは特に、ちよつと介入するようなことでもないかなと思って、ボランティアさん同士のコミュニケーションに、お任せしています。

ただ、まだ、来月から新規の方が入るといふ点からは少し課題があります。発表でも触れましたが、月1回報告会(定例会)を行っています。発表ですけども、自由席で座ってもらってると、やっぱり仲の良い人たちだけで固まって座っているんですね。研修の時に、そこに新規の方が一緒に研修を受けたときや、グループワークやりましようってなった時に、交流員さん同士の仲の良い人たちが話をしていて、新規の方がどこに行けばいいんだろうとか、誰と話したらいいんだろうみたいな、困惑されていたこともありました。これを受けて、来月の定例会からはクラス替えに伴う座席替えをしようみたいなことを考えています。こちらから座席を指定することはないんですけども、新規の方が入ることで、隣の先輩にいろいろ聞いたりとか、もう交流員さんからこういうことだよってサポートをしてもらうために、クラスの座席表みたいな感じで座席を決めて、例えば、あいうえお順で座ってくださいね、みたいなことで、しゃべるきっかけみたいなことを提示しようかなというふうに予定しています。実際今月の定例会のときに「ちよつとこんなんしたい」って、ご相談したときに交流員さんの皆さんも「いいね、それ」みたいな感じでご了承いただけたので、来月からしばらく館の方から、サポートはしようかなっていうふうに考えておりますが、本当にボランティアさん同士の仲間づくりってのは特に何もしてません。

永恵…ありがとうございます。特に何もしていないというのがポイントかなと思います。鬼本さんいかがですか。

鬼本…何か積極的に関わるっていうことではないんですけど、姫路もそうだし、福岡もそうだったんですけども、その各グループに一人、1人ないし2人の担当学芸がいるというふうにお伝えしたと思うんですが、担当学芸員がちょこちょこその活動の時見に行くとか、さっき言ったみたいにレクチャーするとか、みんなと一緒におんなじことをする時間っていうのが、あるかなっていう気がします。それ結構大事かもねと思います。

あと私が福岡市美に行った時には、例えば学校団体でガイドツアーがありました。そのあとにちょつと反省会をする。その時に学芸員とボランティアとコミュニケーションとるみたいなこともしていました。いろいろお話を聞いたりとか。よもやま話ではないんですけど、そういうお話を聞きたいなことをやってみましたね。やっぱり一番大事かなと思うるのは、ボランティア室があつて、結構自由に出入りができて、お茶とお菓子があるっていうのが意外に大事かなと思ってます。

永恵…それ本当に大事ですよ。施設の話になるので、なかなかすぐに、どちらの館でも取り入れられるって話でもないですが、もしいま自館に無いとか悩んでらっしゃる方がいらっしゃるならば、コミュニケーションを取るということがポイントかもしれません。当館の場合は、職員とボランティアが同じ部屋にいるんですよ。それこそ「おはよう」から始まって「さようなら」まで、極端な話同じ空間にいるわけですよ。なので、コミュニケーションについては、特に何も意識的にしていることはなくってですね。だから質問のなかに、コミュニケーションの秘訣とか日常的な関わりをどうされていますかというのがあったんですけども。私個人としては、別にその同じ空間にいるから、そこをまず感じてないですね鬼本さんと私も一緒に、ボランティアさんからの話をよく聞くんっていうところですね。何か一緒にするっていうのもあることもそうです。

これ本当に僕個人の意見で、館でそうしてるわけじゃないんですけど、仲間づくりは、仲間が必要な人がやるんじゃないのって思っています。仲が悪いのをほっとくとかって話ではないと思うんですけども、ボランティアで来ていただいている方は、何かやりたいことがあつて、その行き先として、ミュージアムに参加されてるわけですから、参加する人の方向性は多様なんですよ。でも、ミュージアムに来て何かをするっていうのは一緒だと思うので、ボランティアさん同士の仲間作りの点を、そこまで気にしなきゃいけないのになつてというのが、実は個人的にちょつと思ってる場所なんです。ちょつとこの話はどう、ボランティアの集まりが何なのかっていう話にも近づいてくる話にもなつてくると思っています。

これもすごく私の個人的な経験なんですけど、ボランティア辞められる方がいらつしゃつて、86歳なんですけど、もうボランティアとして20年近くいらつしゃるんですよ。そうすると、この博物館での活動が退職後の長い人生の中でもう20年もいるんですよ。ご自身の事情があつて辞める、辞めざるをえないんだけど、辞めちゃったらばコミュニケーションが一つ減っちゃうんだみたいなことが起こってくる。何ていうんですかね、うちの施設がですね、ボランティアとして参加されてる方にとつて、居場所になりつつあるのかなっていうふうなことは感じてはいます。ですから、ボランティアの声ももちろん聞くんですが、聞こえてくる環境ですね

先ほどの話で、私に言ってくださった方も、人きりの時にポロッと話してくれたのでびっくりしたんですけど。ボランティアの皆様の声を聞ける状態・同じ空間にいると言うのが当館の施設的なメリッ トですが、施設が無理でも、ボランティアさんと接する環境を整えて、いる・作っているのが重要だと思っています。



永恵：これは具体の質問が長崎県さんから来てますね。読み上げます。「新規の方で、これ新規のボランティアさんですかね。の方で展示案内の実践になかなか踏み出せない方がいます。研修で座学以外で実践するための体験などの具体例などはありませんか」というふうな質問が来ています。展示案内をやられてないところもあると思うんですが、考古博物館の場合には養成研修で、展示案内やスポット解説の対応をしています。養成研修の中で、スポット解説のやり方を説明して、実際に見てもらった上で、「自分達でもやってみよう」という実習をして、その場に慣れるっていうことをしています。その後、ボランティアになつてからは、本当に実際に学校団体さんで体験をして、展示室の中で練習をする機会っていうのを設けて、やっています。ですから、座学以外で実践するための具体例ってのは、『実際にやってみる』っていうのがこの質問の回答になるかなって思うんです。鬼本さんどうですか。

鬼本：リハーサルをします。福岡市美の場合は、いわゆる、美術館でよくやる対話型鑑賞ってやつですね。何が見えますかとか言って参加者の方から意見を募りながら、だんだん鑑賞を深めていくっていうことをやるんです。8回ぐらいの研修で、作品をよく見るっていう実践をして、それから1点だけ解説をするっていうのやって、最後は、対話型鑑賞をフルでやるっていうものです。それはしかも、学芸員と他のボランティアさんを相手にやるんですね。本当に本番みたいにやるんですけど、うまくいかなかった補講もやって、デビューしてもらってます。姫路の場合は、まだ私一年しかいないんですけれども、まずちょっとこれ軌道に乗ってないんですが、こっちは完全解説型です。シナリオ書いてもらって、それでリハーサルをするってことやりました。まだちょっとそれがうまく軌道には乗ってないです。

永恵：坂本さん、フロアスタッフさんでも、同じような状況ですかね。いざ来てみたけど苦手だとかいう方いらっしゃるんですか。

坂本：解説とかが苦手って言われるのはあんまりないんですけど、展示室

の活動で必ずと言っていいほどあるのが、虫とのふれあいの体験なんです。これについては結構、技術を要するところがあるので、一日しかない研修の中で、絶対に練習します。大体4〜5人のグループになつてもらって、そのグループの中で、普段よく出すレギュラー陣の昆虫たちを連れてきて、虫をできるだけ傷つけない触り方、人にも安全な触り方を、学芸員が説明をしながらやります。その輪の中にはグループごとにベテランのボランティアさんに入ってもらって、新しい人だったり、学生さんだったりに伝えてもらいながらやるという感じなんです。それでもやっぱり不安はあるので、初めての人が入るような時には、現場に学芸員も一緒に行つて一緒にやるとかもしています。もしくはものすごく上手なボランティアさんと一緒にやるとかをしていますね。

永恵：ありがとうございます。長期・短期にかかわらず、何がしかのリハーサルであるとか練習っていうのをしているというのが秘訣でしょうし、当館の場合には先ほど説明しました、養成研修の時にもちよつとやるし、実際にもツアー開設ですねっていう、さらにそれを特化したグループがありますので、団体様向けで一時間、ツアー解説して欲しいって方がいらついたら、そのツアー解説グループさんに行つていただくんです。それについては、専門職員が例会でトレーニングを年間通じて行っています。

ボランティアの皆さん全員が全員ですね、当館で言うツアー解説ができる必要性はなくなつて考えてますので、得手不得手、含めてですね、いろんな活動、うちの場合8つのグループへの同好会がありますので、希望に応じて、そちらで活躍をしていただくということもあります。



ボランティアと学芸員の役割分担



ボランティアの役割の話についてなんですが、今回このフォーラム

をやるにあたって、鬼本さんの発表の中にもありましたけど、やっぱりボランティアさんっていうのが、いろんな制度的な変遷というか概念的な変遷を経ながら現在まで進んできたっていう現状があるかと思えます。その中で、ボランティアさんが、いろんな活躍をされ、各館で様々な役割を担われているっていうのが、事実だと思います。今日の発表の中で、各館が取り組みされていることについての話がありました。質問の中に、「当館のボランティアはあくまでも博物館のサポートとしての意識が強く、主体的な活動とまでは言っていないのが実情です。ボランティアの方のやりたいことをもっと積極的にできるような環境づくりのために、職員として何ができるのか」というようなものがありますし、また、「学芸員がすることと、ボランティアさんがすることとの線引きはどうされてるんですか」という質問が寄せられています。たぶん、具体的な話というか、どういった考え方や発想で分けていますかという内容になるのかと思っています。

役割分担というか、ボランティアさんをどうするのか、どういうふうな活動をしてもらったりしてもらいたいのかとかですね。博物館がして欲しいこと、あるいは、ボランティアやりたいこととであると違うんですが、そのあたりの話に進んでいくかなと思っています。鬼本さんいかがでしょうか。

鬼本…さっき私発表の中でもお伝えしたんだと思うんですけど、ミュージアム、特に美術館のボランティアさんっていう館の活動を決めて、募集してるっていうことが多いです。そうすると、ボランティアさんの自主性っていうのはどこにあるのかっていうのを、まずボランティアさんに聞いたほうがいいんじゃないですかって思うんですね。ボランティアさんがやりたい事をやれるような環境って言った時に、やっぱり、どうすればマッチングできるかってのボランティアさんに聞いたほうがいいと思います。変な話、「それは別にしたくない」とっていうボランティアさんだって結構いるわけですよ。任期の話もそうなんですけれども、何かこう、こっち（ミュージアム側）が空回りして、

結局当事者がいないっていう状況になるのだけは避けたほうがいいと思うんですね。

永恵…それは確かに怖いですよ。

鬼本…こっちが「こうあるべきボランティア」「ボランティアってこうでしょう」「みたいに思ってる、隣の館はあんなことしてる、やっぱりうちもやらなきゃみたいにならないように、来たボランティアさんにどう、何がしたいんですかとか、うちではこういうことをして欲しいんですけれども、どうですかねって聞いたほうがいいのかなっていう気はします。みんな真面目だなんて思うんですよ。まず、「うう…」って思い悩む前に、ボランティアさんに聞いた方が良くないでしょうか。

福岡でも面談したんですが、本当は姫路もしたいんです。なかなかちよつと私の時間が合わなくて、すごい苦しい状況なんです。ボランティアのみんなが何を考えて活動してるのかなっていうのは、聞いてみたいです。

永恵…その点、美術館系の話だと、例えば、何か切り抜きしたいとか、清掃したいとかっていう、かつてのスタンダードなボランティアらしいやると思いますが、ボランティアさんの中で、こういう活動に希望が多いとかってありますか。

鬼本…すみません、それに関連して、ちよつとだけ位相の違う話をするんですけど、美術館のボランティアもさっき言ったようにやっぱりすごい歴史的に変化があるので、例えば本当に最近始まった、「トビラ」さんとか「ナガラ」さんとかなんかは、逆に、ボランティアって本当に市民団体っていう形で、人が集まって、「それぞれの得意分野で、これしたい」「この美術館でこれがしたい」ということを、この指止まれ形式でやる。こういうプロジェクトを立てて、指に止まった人たちでそのプロジェクトをするっていうようなことをやってたりするんですね、私は結構老舗の美術館を渡り歩いているので、前からあるガイドとか、新聞クリッピングとか、そういう、もう既にあ

る活動を、どうやってボランティアさんが楽しくできるかっていうのを考えるっていうのに、ずっと携わってきたんですよ。本当にその館がどういう活動をボランティアさんと一緒にしたいのかっていうのをちゃんと明言して、かつボランティアさんにいいですかって聞くっていうのが、やっぱり一番大事かなと思います。

永恵：当館の場合には、最初に養成研修で面談をしますって話をしましたけど、ボランティアに応募してきた方の中には、「展示がしたい」とか、多くはないんですけど、よく見る志望理由に「発掘調査もゆくゆくは経験してみたい」っていうふうなことがあったりするんですよ。最近では、ボランティアさんで調査をしている発掘現場も、実はあります。発掘調査は、文化財の保護の実務の一端なので、そういう行為にそのやり方でいいのかなってのはちょっと思うんですが、ボランティア趣旨からは、少しずれてるのかなと思います。

考古学に関することを当館は、大前提として、考古学に関することをしたい人が来て欲しいわけです。考古学のことで何かしたいっていうのは、別に考古学の勉強でもいいし、考古学に絡めた体験でもいいし、歴史に関することでも全然いいんですけど、応募者の中には、やりたいことをすごく絞ってこれる方もいらっしやったりします。そういう状況の中で、やっぱり面談をする・コミュニケーション取っていくって、すごい重要だなと思っています。何をしたいですか、どんなことされたいですかって言うのをして、しっかりと聞いていくことが大切ではないかと思っています。

当館のボランティアにはグループがあると言いました。館の業務に紐づく内容に関するグループってのが、8つありますが、もともとは8つではなくって、グループがいっぱいあったんですよ。余りに群雄割拠をしたので、当館の側で整理したんですよ。整理をして、「君たちは今日から〇〇グループだ」ってしたんですよ。そうすると、館としては（内容が）一緒かなって思ってたグループが、くっつけてみると、みんなやりたいことが違ってたってことがありました。それはま

だ今も全ては解消はされてないんですけど、ミスマッチの状態が続いていて、考古学したい、歴史に関連することしたいと思っても、やりたいことの方向性が違ってしている状態に実はなっちゃっています。どういうふうなことができるのか難しいなあと、実は思っています。

一方で、当館の場合、考古楽倶楽部もあるので、館のボランティアでできないことは、そっちでするんだっていうふうに分けてる方もいらっしやいます。いい意味で、調整弁になってるって言うたら変なんですけど、あくまで館ボランティアは館に紐づくことしかできないんだね、でも他にしたいことがあるんだよ。だから倶楽部の同好会でやりますっていうパターンが結構あったりしますね。積極的な活動ができてるかかっていううちの館はすごくやっているので、なので、その悩みがあまりなくてですね。何なんだろうな。難しいなと思って。薄々思ってるんです。どう、当然それは他の館でも似てるのかなとは思っただけでも、さつきも、



ミュージアムの性格によるボランティア観の違い



鬼本：ちょっとだけ、すいません。もう一つ、ボランティアさんの方が賢いのですよ。ある意味ですね、これは都会だったからっていうのがあるかもしれないんですけど、けっこう他館とボランティアの掛け持ちをしている人がいるんですよ。なので、うちでできないことは、九博さんでやってたりとか、アジ美さんでやってるとかがあります。あるいは、まち案内ボランティアとかやってたりとか。姫路もありますね。お城のボランティアやってる人とか。なので、ボランティアさんから言ってみれば、自分の館って、ただの選択肢の一つだっていうことを、ちょっとミュージアムとしては自覚していたほうがいいのかなっていうのもあります。あとやっぱり、永恵さんのお話聞いてて、そのあたりが人文系の限界かなってのは思います。資料に直接近づくと、というのが、やっぱり学芸員の方もすごく抵抗感があって、そこが

たぶん、自然史系とのボランティアとちよつと違うところもあって思っ
たんですけど、坂本さんどうでしょう。

坂本…抵抗感少なめの坂本です。自主性、うーん、どこから話をすればと思っ
たんですけど。確かに今、最後におっしゃった、いろんなボランティア
アを掛け持ちしてるっていうのは自然系でも、もちろんそうです。人
にもよるんですけど、特にうちなんか限定した期間のボランティア
ですけど、他に環境系の団体さんに行ってるとか、結構そういうの
はあります。だから、いつも研修会の時には、保険の話聞きます。
いわゆるボランティア保険って、事業に対してかかるんじゃないって人
に対してかかるので、その人がどこかで入っていれば、有効なんで
すよね。だから必ず最初に、他でボランティア保険入ってませんかっ
て訊くようにしています。

あとさっきの自主性の話ですけど、自主性もいろいろあると思うん
ですね。ボランティアの活動として、自主的に「こんなボランティア
活動、こんなイベントをやりたい」っていう人もいれば、そうじゃな
くて、「博物館で何かちよつと見たい」とか「何かちよつとやりたい」
とか、またはその両方もあると思うんですけど、うちの館の場合には、
後者の方のちよつとなんかしたい的なやつは割と、応えてると思ひ
ます。それこそ「採集したい」みたいなことだと、さっきの触れ合い
の体験の虫って普段は飼育している虫を出すんですけど、展示のテー
マによつては別に外で捕ってきたって構わない。じゃあ、ちよつと学
生さんと一緒に捕りに行こうかとか言つて、みんなで取りに行くこと
もあります。それで、朝採れた虫を触れあう体験に出しちゃうみたい
にして、臨機応変に対応することもあります。収蔵庫を見たりとつて
いうのも、さっきもお話したみたいに、実習生と一緒にいくとかも
ありますし、閉館後にちよつと時間を取つて、みんなで見学する時間
を作ることもあります。その辺りはその場に依じて、私たちができる
ようであれば対応する、という感じです。いっぱい自分で自主的に何かそ
のボランティアの活動の中で、「こんなことしたい、あんなことし

たい」っていうことは、実は言われることは少ないです。どっちかと
いうと、ボランティアさんにもよるんですけど、そんなに、やる気満々
で来てないっていう言い方をするとか失礼かもしれないんですけど、が、
シニア世代の人の中には、例えば家にずっといるんだから、どこかで
ボランティアにでも行ってきたらって家族に言われて来ましたってい
う人がいたりもするんですよ。

永恵…なるほど。

坂本…何となく館に来やすいから来たけど、お手伝いがしたいだけで、特
にこれをやりたいってことがある訳ではないんです、っていう人もい
ます。それはそれで、どちらも全然ありじゃないかと思っています。

永恵…ありますね。

坂本…そうなんです。それこそ、ご家族に暇そうだから行けって言われ
てきた人も、虫捕りしたら楽しんじゃって、その後一〇年ぐらい毎年
来られたりするわけです。そういった形のボランティアのあり方って
いうのも、もう大いにありだと思っています。それで楽しんでもらつ
て、館を居場所にしてくれたら、僕らは大成功かなって思っています。
家族に言われたつてのは自主性じゃないかもしれないですけど、そう
いった形も、それはそれで大切にしたいかなって思います。

永恵…確かにそうなんです。今回の実は申し込みでは、今年度は結構歴
史系が多くつてですね。美術館さんも当然いらっしゃるんですけど、
歴史系の申し込みが多くつて、あるいは総合系の博物館が多くつて
ですね。その人文系が多いという傾向のなかで、「主体的にやるんだ!」、
「どうすればいいんだ!」という内容の質問があったのかなと思つて
います。いやよく振り返つて考えてみれば、自主的かどうかというよ
り、家族に言われたから来たに類する志望理由の方とかも、うちもい
らっしゃるんですよ。友達がいるから来たんですっていう方もいてで
すね。それでもちゃんとこちらの、養成研修をずっと受講されてます
し、そういう意味では本当に鬼本さんの発表にあったみたいな、館つ
ていう場所なんだけど、それは何かをするために集まってるという

よりは、場所なんですよ。たぶんサードプレイスみたいなところに、ミュージアムがなつてきているのかなと思いますし、先ほど、現代社会にあつて、そういう存在が必要になつてきているとおっしゃつてたのも、そうなのかもしれないと、ちよつと思つています。こままで、自然系・美術系と考古学で話をしてました。神戸市博さんいかがでしょうか。

萱原…いや、もうお三方がなんか結構十分ご説明されてると思うので、当館からあんまりないなとも思うんですけども。先ほど新本さんがおっしゃつてたように、当館の方も他館さんのボランティアとか友の会とかボランティア兼任されてる方が、結構いらつしやいます。うちでは教育普及というふうに限られているので、こんなことやりたいと思われても、どうしてもシステムというか、当館が定めてる、活動内容的にできないことつていうのもあります。その場合は、ボランティアさんご自身で考えて、考古学やりたい人だつたら、埋蔵文化財センターのボランティアにも行かれてますし、美術系のことなんかやりたいなと思つたら、そういったところにも行かれていきます。ボランティアさんにとつて、ミュージアムが選肢肢の一つつていうのは話を、私の方もヒシヒシと感じています。

あと面談の話も出てたんですけども、登録にしても更新にしても面談つていうのは一切やつてなくて、書類選考みたいなところで何やりたいですかみたいな志望動機聞いたりとかつていう状態です。だから、ボランティアに入つてから、思つてたのと違つたみたいなことは、言われることはあるんですが、皆さん熱心なうちの活動に合わせて方針に合わせて活動していただいているので、我々の方もその活動にサポートしたり、応えられるように体験学習室で活動していただいているんです。外部からのイベントがあつたらどんな情報共有しますし、当館は休館の期間が多かつたので、活動できる場所がないつていう時間かなりあつたんですね。そういう時は、他の施設の方と調整して、もしワークショップやりたい場合はどこその、近くの図書館があるん

ですけども、そのスペース借りられたのでそこでやつてもいいですよみたいな感じで、休館で活動が制限されても代替の活動もできるようにしていますし、活動できる場所や環境づくりつていう面での取り組みを行っています。割とうちのボランティアさんの場合は、館内で活動をやりたい人が多くて、あんまり外に行く声が少なくなつていう現状もあり、うちとボランティアさんでは、活動に対する意識にちよつと差はあるのかなつていうのは少し感じてはいます。でも、皆さん熱心にされてるので我々も、それに負けないように関わつていこうとは考えています。

永恵…話を冷静に聞いてて、たぶん、今の感じが人文系の堅さつていうことなんですかね、鬼本さん。

鬼本…単純に、例えば今朝とつていた虫を展示するみたいなことは人文系つて、できないじゃないですか。

永恵…そうなんですよ。

鬼本…その辺で出た貝殻とかを飾るとか、やつぱできないんじゃないですか。ちゃんと調査して、それが何かつていうのを同定してから、收藏しましうかみたいなの。

永恵…我々の場合だと、急に土器拾つてきたつて言われても、それどこで拾つてきた、なんでここにあんねん、みたいになります。

鬼本…そうですね。証拠が必要やろみたいなところがあると思うんで、やつぱ、資料への近さつていうのが、全然自然史と人文と違うんで、そこがやつぱりボランティアの性格にも関わつていふし、学芸員の性格も人文系と美術系・自然系ではちよつと違ふなつて思うんですよ。

でも、実はそれに合わせた人がたぶんボランティアで来てるつて私は思つてます。わりと樂觀的に思つてるので、むしろボランティアさんたちに、活動の使い分けしてもらつたらいいのかなと思つてます。永恵…なるほど。だから、その使い分けつてのは、中の活動もそうだし、博物館にあるボランティアも1箇所だけではないつて話として、こつちではこういうことがしたい、あつちではこういうことがしたいつて

いうふうな住み分けっていうんですかね。

鬼本…そうそう、そうだなあと思って。なんというか、ボランティアを受け入れてる側としてはそれぐらいちよつとこう、緩くていいのかなって。ボランティアさん他にも選沢肢があるよっていうことを、私たちはちゃんとわかってれば、もうちよつとこんななんか、堅くならずに済むのかなっていう気はします。

永恵…いま良い言葉ができましたね。緩くていいってすごく良いですね
鬼本…緩くていいと思います。



「ゆるくていい」



永恵…今年、私は初めてボランティア養成研修を担当したんですけども、

私自身がバチバチに緊張してですね。どういうふうになったら、そもそも来てくれるんだろうとか悩みました。もちろん研修の自身には、考古学の話が当然入ってくるので、それは楽しくて仕方がなかったんですが、それ以外の活動に関するところとかは緊張しました。具体的に言うと、接遇であつたり、「ボランティア活動には〇〇が求められるんだ」って話の時ですね。でも、その反面「こんなふうなこと言ったら来てくれへんなるんちゃうのかな」とも思っていました。自主的に何かやりたいと思つて来ていただいているのに、そこまで養成研修でルールで縛つていつて良いのかなって思つて、うーんって悩んだりしました。鬼本さんと坂本さんのお話だと、それがまさに人文系のわかりやすく堅いところなんだなつて思いました。もちろん、ボランティアに来ることで家でも職場でもない居場所になつてるんだ、やりがいを感じて居場所にされてるつて方も当然いらつしやるわけですし、そのやりがいって人それぞれ、だと思ふんですよね。鬼本さんの発表の中でOB会があるつていうのを聞いてそれもびつくりして。そうすごいですよねOB会つて。居場所ですよ本当に、それつて。

鬼本…そうですね。美術館側からの発想としては、せつかく10年も来てく

れていたのに、辞めたらプツンつて関係性が切れちゃうのはもつたいないねつていうのが、動機としてあつたと思ふんですよ、あの時。あとボランティアさんの側から考えたときに、辞めちゃうと来にくいみたいなどころもあるかなと思つて、それでOB会つていうの、作りました。

永恵…うちは逆にそういうものがなくて、任期も定年もないので、どこまでもいけるだけ来ていただくつていう、ちよつと言葉があるかもしれないけど、自然減に任せています。なので、どうしても、特に人文系や歴史系のボランティアにかんする考え方言つてもいいかもしれないんですけど、ボランティアに何かしてもらわなくちゃいけないよねつていう発想自体が、引いて見ていくと、ボランティアさんは職員の代わりつて、どつかににそういう考えがあるんじゃないかなと思つて愕然としています。自分を振り返つてるんですけど、そういうところが人文系どつかに心で思つてないかな、大丈夫かなつていうのはちよつと気にしています。いや、だからいつて美術系・自然系は人文系と違つて、全くそうではありせんという話じゃないと思ふんですけど。

鬼本…なんか、今の悩みや課題についてもう1つ思ふことは、たぶん、これはすいません、なんかすごい俗人的なつてしまふんですけれども、もしかしたら、坂本さんと私が教育ベースの人間だから、ボランティアさんにかかることを、緩く考えるのかもしれないなつて、ちよつと話を聞いてて、思つたんですが、坂本さん、どうでしょう。

坂本…そういう面はあるかもしれないですよ。なんか話の流れ的に、自然史めつちやゆるいやんみたいな感じだったんですけど。

鬼本…いえ、いえ（笑）

坂本…確かにゆるい面もあるのかもしれないけど、分野というよりも各館の状況だつたり、担当者の考え方とか想いとか、その中で大事にしていることとか、そういうところがある程度反映されてるのかなつて思ふいます。もちろん、きちんとしないといけないところはあつて当たり

前ですけどね。虫はすぐ展示に出すこともありますけど、生きてるものなので、気をつけないといけないことはあるわけです。例えば来館者にけがさせてしまうような昆虫だったらいけないなどで、実は虫選びにも知識や技術がいるんですよね。その辺をちゃんとするとか、そういった個々の大事にしなければならぬポイントっていうのはありながらも、でもそこをクリアできれば、割と気軽にできるっていうところが、自然史のいいところかもしれません。あと博物館の資料と来館者の距離感とか、そういったところを考えつつ、既存のルールっていうのも気にしながら、芯になる部分をちゃんと持っていて、それが大事にできていけば何とかなるんじゃないかなと思うんですけど、ながら、やり方を考えていくっていうふうに、僕は考えて実践しています。なので、別に人文系だからやりにくいとかそういうことはきつとないんじゃないかと。勝手に思っているんですけど。

永恵…ありがとうございます。勇気をいただいております。
一同…笑

永恵…人文系もう1人どうですか。

萱原…そうですね、今もう1人、担当今ちよつともう1人の担当は、教育学部出身でちよつと教育方面からいろいろ考えてたりとかもしてるんですけども、うちやつぱりちよつと堅いよねっていうのは、やつぱり担当の方でも思っています。なんでしようね、なんか当館のイメージに我々もちよつと引つ張られてしまっているところがあるって、ちよつと緩くしたいけど、「何かこれってうちの活動として、うちのイメージに合ってるかな」みたいな。だから、そういったところ気にしてしまって、ゆるさ加減って言ったらいんですかね、そういうところがうまく他館さんと比べてうまくいってないのかなっていうところもあります。一方でボランティアさんたちにはいつでも来ていいよっていうふうに、割と変なところで自由主義じゃないですけども、うちでもバランスを何とかとって行かなきゃいけないと、鬼本さんと坂本さんのお話聞いてて思いました。すごく思ってるんで

ですけども、やつぱ、堅いですね。やわらかくなりたいです。



ボランティアもお客様の一人



坂本…すみません。いや、堅い柔らかいというのは、たぶん館の性格にもよると思うので、それぞれのご事情があると思いますから、別にいいと思うんです。いっぱい皆さんがどう思われているかなと思ったのが、うちの館では基本的には、ボランティアさんもお客さまなんですよね。利用者の一員なんです。だから、もちろん館のルールがあつて、職員が大事にしていることを守っていただかないといけないのは、ボランティアさんに求める部分としてあるんですけど、それ以上に、ボランティアさんも館の事業を手伝おうとしてくれているお客さまなんです。なので、その人たちが活動を楽しめるようにしたい。それから、その人たちの貴重な時間を館のために使ってくれようとしているんだから、それに対して「来てよかった」って思えるように、できるだけ限りのことはしたいなっていう気持ちがあつて、それで、僕たちはどうできるかなって考えています。皆さんも、もちろん同じように考え、それぞれのやり方の中でボランティアの人たちに、やりがいを持って帰ってもらえるようにとか、考えておられるとは思いますが、うちの館ではそんなそういうところがベースになっているのかなっていう気がしました。鬼本さんたちはどうですか。

鬼本…もう全く同感です。やつぱりボランティアさんが、一番ディープな美術館の利用者だと私も思っているので、ボランティアさんたちが楽しく、美術館活動に関わってくればっていうのは思っています。一方で、やつぱり館のミッションとかその美術館として、大切にしないといけないっていうこともあるんで、それは学芸員が伝えていくっていうところが、重要なことだと思います。

個人的にはやつぱり、自分がもしボランティアするならばどうする、どうあつて欲しいかなっていうのは、ちょこちょこ思ったりはします

ね。これで本当にいいんだろうかとか。あと美術館の方が、けっこう美術館の担当者の方がまだまだできていなかったりもするので、お節介に言ってくださるボランティアってのは、ある種ありがたい存在だと思ってます。昔私のすごい尊敬するエデュケーターがですね、「担当者はボランティアに育てられるのよ。だからボランティアはちゃんと担当者にだめ出しをしなきゃ駄目」ってボランティアいる前で大きい声で言っていたことがあります。

萱原…我々よりボランティアさんの方が人生の先輩だったり、ボランティア経験が長い人たちがばかりなんで、我々も何か教えられることの方が多くなっているのは、すごく感じてます。

鬼本…さっき坂本さんボランティアさんはお客さんなんですよってっておっしゃってたように、やっぱり利用者なので、外から見た美術館とか博物館っていうのを知ってるわけですよ。その言葉っていうのは、あんまり軽々しく考えちゃ駄目だと思ってます。内側にいると分かんないことを教えてくれる人達ですから。

永恵…そうですね、どうしてもそこって、我々学芸員自身はいいものをしてるんだって思ってしまったところがありますよね。外から改めて、館に最も近いハードユーザーであるボランティアさんから、いろいろなお声をちょうだいするっていうのは、重要になってくると改めて思いました。

難しいんですよ、私もねボランティアって本当に養成研修もこの一年で担当してて、右も左もわからない中でしているってのが正直なところで。それがあって、今回のこのテーマを選んでいるっていうのもあります。ただ、逆にね、その事前発表もそうですし、今日の発表の中でも、鬼本さん坂本さん話とか聞いて、恥ずかしながら「へー」っていうことが結構あって。うん。今すごく頷いてる人もいますね。トークセッションの中で、「そういう心持ちでいたらいんだ」とか「そういう方法があるんだ」っていうのが一杯あったなというふうに思っています。今回の館種を問わず、クロスボーダーに話をしてるっての

が、まさにそうなんですけど、なかなか、他の分野同士で話をすることもないですし、研究会でもお会いすることもなかなかないんですけど、こういった形で、いろんな話を伺えるのは貴重な機会だなと感じました。どれも正解がある話ではないかと思うんですが、今よりも、より良くするために議論をしていたり、活動内容を知るってのは重要ですね。

今ちょうど、16時15分です。そろそろトークセッションの終わりに近づいてきましたが、お聞きの皆様質問は大丈夫ですか。今このメンバーに聞いておこうってことがあったらチャットに書き込んでください。ちなみに、昨年度も言ったんですけど、今日参加の皆様、何かあったらそれぞれの発表者の皆さんに聞いてもいいですよ。今日の参加者の皆さんから「フォーラムで聞いたんですけど」って個別に連絡行っても大丈夫ですよ。

坂本…僕はもうメールアドレス出しちゃったんで全然大丈夫です。

萱原…お手伝いできることがあればどうぞ。

鬼本…大丈夫です。

永恵…皆様、ありがとうございます。



ボランティアを立ち上げる



永恵…東大阪市さんから質問が入りました。読み上げます「本市では、土器の洗浄や古墳の清掃などの業務ありきの請負型でボランティアさんを頼っていますが、これをボランティアさんの意思でやりたい事業にしてみよう事業創出型に意識改革するにはどのような方法をとればいいでしょうか」という質問です。1つには、身も蓋もない話ですが、請負型のボランティアを止めるのが1つなんじゃないでしょうか。実際、展示物を拭いてる行為がある姫路市さんいかがでしょうか。鬼本…なぜ事業創出型へ意識改革する必要があるのかっていうのを、もう少し聞きたいです。その必要があるってこの方を持ってるみたいで

すけれども、何ですかって。

永恵…別にこれ請負型でもいいんじゃないですかね。

鬼本…いいんじゃないですか。いいと思いますけど。

萱原…やりたいから来られてるんですよ。

永恵…これがしたいからいらっしゃってて、それが形として分類すると、業務請負型になってるだけであって、別に、ボランティアさんからお声が上がってるんですかね。東大阪市さんもしよければ、書き込まれますか。

鬼本…これ、もし何か私のその答えがとんちんかんでなければ、たぶん東京都美さんとかに、調査に行かれたほうがいいかなと思うんです。ちょっとだけ言うと、事業創出型であるジュニアアテンドは、ワークシヨップを比較するっていうことをやったっていうのお伝えしたと思うんですけど、めちゃくちゃ手間がかかります。普通のボランティアさん以上に、ものすごい手間がかかるんで、その覚悟があるならやってもいいんじゃないですか。

永恵…実際、そうだと思うんです。事業創出型に切り換えてっていう話になると、すごい大変ですよ。

鬼本…すごい大変ですね。

永恵…準備も大変だし、準備したとて意識が改革するかどうかは、個々人の話になってくるので。あつれきが生まれたりして、そもそも今までしてたこともできなくなっちゃうんじゃないかなと思うんですが。

鬼本…どうしよう。たぶん人と自然の博物館さんなんかはちよつとこれ、近い方がやってらっしゃると思います。坂本さんご存じですかね。人博さんなんか、わりと地域研究員的な感じで事業を作ったりしてたと思うんですけど。

坂本…僕も実は最近の事例は全然知らないです。20年ぐらい前にボランティアのことを勉強しようと思って、人博のボランティア講座を受けたことがあるんです。たしかその時には、ボランティア研修の途中からグループに分かれて、イベントを企画しようっていう感じでした。

進んで、卒業したらグループに入って自主的にイベントをやっているんだっていう感じだった記憶があります。現在どうしているかは、それ以降全く関わってないのでわかりません。

永恵…ありがとうございます。業務請負型と事業創出型のボランティアについて、同じボランティアさんじゃなくていいわけですよ、たぶん。いまいらっしゃるボランティアさんを、どうトランスフォームしようかという質問かと思うんですけども、おそらくそれは、ボランティアさん自身からそういうお声がないのであれば、新たにお越しいただくっていうのが手なのかなと思います。

鬼本…別に、グループを作らなくても。

萱原…作り変える必要はないんじゃないですかね。

永恵…うちの館でも、たくさんのグループ・同好会があるのも一緒です。チャットに兵庫県立考古博物館の中村さんという方から「先日イチケイのクラス」の再放送で人のれんが職人の話がありました。それが参考になるかも」という書き込みがありました。皆さんこれは、わかりますか。

鬼本…これ有名な話ですね。「何してるんですか」って言って「レンガを積んでるんだ」・「教会を作ってるんだ」・「町を作ってます」っていうそういう話じゃなかったでしたっけ。

永恵…だから、分けましようって話ですかね。東大阪市さんから、追加の書き込みがありました。「本市では文化財ボランティアがいて、これが業務を請負う形になっています。それで、これから本市に新博物館を整備する関係で、別途、新博物館のボランティアを集めていくつもりです。これまで我々職員が請負型で運用していた分を新たに創出型のボランティアを育成するためのノウハウが、不足していたので質問した次第です。」とのこと。

一同…なるほど。

永恵…その状況ならば、これまでのボランティアさんとは別に、新しい方に来てくださって募集するのが手かなって思います。既存のボラン

ティアさんである、文化財ボランティアさんをどうされるかという課題が一方であるとはいえ、博物館のボランティアは別個のものとして考え、文化財ボランティアをトランスフォームしていくのではなくて、新たに集めていく方がいいのかなというふうに思います。たぶん正解は、ないと思います。いま横からリアルチャットが飛んで参りました。「ぜひ事例調査にお越しく下さい」ということですので、今日の発表の皆様のところにお話に行かれることですね、うちにも来ていただきますことをお願いしたいと思います。

いいですね。このリアル感がいいですね。ありがとうございます



発表者が伝えたいこと



永恵…時間が実は迫りつつありまして、司会が拙いところがありまして、話し切れたとは言えないですけども、最後に、何か皆様、私を含め、今日の参加者を勇気づける一言をいただければと思うんですが、いかがでしょうか。

萱原…私からは、最初の岡山県美さんからの質問で答えきれないところがあったんで、ちよつとそれを追加でお答えします。なぜ定年制設けているんですかっていうご質問だったんですが、当館では5年後には再応募できないことにしています、より多くの人に当館のボランティアである学習支援交流員に参加してもらうためというのが、その理由です。あと初期の頃は定年が2年だったんですね。それを、ボランティアさん側から、もう少し長い期が欲しいなっていう依頼があつて、5年という今の状態に伸びている状況です。先ほど足らなかった回答をこれで、させていたどうかと思います。

終わりにですが、私も永恵さんと同じように、坂本さんとか鬼本さんの話を「へー、そうなんだ、フンフン勉強になるな」っていうふうに聞いていました。我々もまだ経験が足りないの、とてもいい時間だったと考えておりますし、当館では、学習支援交流員の活動を教育

普及メインで行っている、皆さんの何かの助けになることがあれば、ご連絡いただければ、と思います。我々も今後勉強してどんどん、ボランティアさんと活動していきたいと思ってます。

永恵…ありがとうございます。では鬼本さんお願いいたします。

鬼本…今日は楽しい時間ありがとうございました。私もすごくいろいろと勉強になりましたし、皆さんがこういうこと悩んでらっしゃるのになっていろいろを教えてもらえて、すごいよかったなと思います。自分の館の活動の参考になるかなと思いました。

すごく余談なんですけれども、私20代の頃から定年退職したら自然系の博物館で、ボランティアやろって言ってます。だんだん定年も近づいてきたんで、その夢がもうすぐかわいそうだと思って、一人でホクホクしてるんですけども、やっぱり自分ももしボランティアやるならっていう視点は、ボランティア担当者には必要だなと思ってます。ボランティアさんへのお願いとしては、美術館とか博物館ってけっこう大変なんだっていうのをわかってもらいつつ、生温かく見守っていただいたり、時には叱っていただけると嬉しいなと思います。どうもありがとうございます。

永恵…ありがとうございます。今日、話聞いてらっしゃる方の中には、現役のボランティアさん何名かいらっしゃいますので、そういった施設側、あくまで今日は施設側の話が多かったですけども、むしろ施設側ではなく、ボランティアさんにもお願いしますっていうところもありますね。私の至らないところでございました。では坂本さんお願いいたします。

坂本…今日はありがとうございました。いろんなお話を聞けて楽しかったです。うちの館のフロアスタッフの話をいっぱいしましたけど、フロアスタッフは今やってないのに、偉そうにいっぱい言って本当にすいませんでした。

でも1つ、うちの館なんか本当に小規模で、活動の部屋もないとか、人も仕事バタバタしているとかというネガティブな話もしましたけれ

ども、フロアスタッフ以外に、いろんな人たちとの関わりで博物館ていうのが成り立っていて、イベントのお手伝いみたいなことをやってくださったたり、調査と一緒にやってくださったたりしています。ボランティアって一括りに言っても、博物館って、いろんな人が関わって作り上げていくっていう流れもあると思うんですけど、そんな中では、いわゆるボランティアのグループだったり、制度だったりばかりなのに、こだわる必要はなくて、いろんな形があつて、それは館によって、その館の性格だったり、規模だったりで、できることがあると思います、できる範囲でやることでボランティアさ身も、館の人もお互いに無理せず、やっていうことができれば、ボランティアの形態どうこうじゃなくて、いろんな人たちが関わられるような博物館になるということなのば、それはそれないんじゃないかなっと思っています。

ボランティアについて言いますとりいろんなタインの人が来てか、博物人も楽しいこともあれば苦労することもあると思いますどころ怒られたり文句が出たりすることもあると思うんですけど、たぶ、ボランティアに来る人って、基本的に、その館に「ボランティアしに来てたろう」と思ってきてるわけであつて、館に対して前向きな気持ちで来てくれてはる人が多いと思うんです。そういう人たちのために仲良くして、味方になつてもいいって、それを自分たちの仕事、館全体の発展に繋がるようにしていけたらいいなっ個人的には思っています

永恵…ありがとうございます。私、今の発表の中でも、或いはトークセッションの中でも言いましたが、別に教育普及が専門でもなく博物館学が専門でもなく、人事異動で学習支援課にて、ボランティアの養成に関わっている立場です。もちろんご専門の方でそのままでいる方もいらっしゃるし、異動がある方もあるし、ボランティアに関わる局面っているんなパターンがあると思います。その中で博物館の運営面から、あるいは、自館をより良くする・楽しくすると言う点で、ボランティアっていう話について、これだけのたくさんの方にご参加いただいております。今回の内容が、非常に学芸員にとって関心のあるテー

マなんだなと改めて思うとともに、ボランティアって何が正解かってのは本当にわからないです。特に人文系にあつては、緩くやりましようってのがまず一つあるんでしようし、それはボランティア自身もそうですけど、いろんな立場のいろんな考え方があるんだってのはよくわかりました。今後とも、いろいろ話をしていきながら、ボランティアとの対話や、他の分野の方との対話をしながら、よりよい活動を進めていければいいかなというふうに、本当に今日の覚める思いでいろんな発表を聞かしていただいております。

今日の発表者の皆さんも顔は知れてるわけですし、お名前も知っているわけです。人となりもわかったかなと思います。坂本さんに至ってはメールアドレスも出していただいていますので、東大阪市さんはじめですね、同じく悩んでる方は一人ではありません。皆さん一緒に交流というか、連絡取り合つて、今回をきっかけに進めていっていただければ嬉しいなというふうに思います。はい。なんか適当なことを申し上げましたが、いまだ4時30分となりました。至らない点もあつたかと思いますが、これでトークセッションを終了したいと思います。最後に閉会にあたりまして、当館副館長の田中正晴よりご挨拶申し上げます。



閉会あいさつ



田中…皆さん、長時間にわたりお疲れ様でした。本日は古代体験研究フォーラム2023に参加いただきまして、ありがとうございます。全国各地から100名を超える方に申し込みをいただきまして、ありがとうございます。また、本日発表していただきました、萱原さん、鬼本さん、坂本さんどうもありがとうございます。

ボランティアということで、いま博物館にはもう是非とも欠かせない存在となっております。今日の発表にもありましたように、ボランティアの名称については、学習支援交流員とかいろいろありますけれ

ども、制度とか役割も各博物館によってまちまちかとは思いますが、共通点もありました。ボランティアというものが、無報酬ってこれが一番大きい話なのかなと思っております。ただ、無報酬だからこそ、やりがいとかですね、モチベーションを保つことが大事かなと思っております。今日話の中でもありましたけれども、ボランティアの方も博物館のお客様という話が出ておりました。これは非常に大事なことじゃないかなと私は感じております。この意識を忘れなければ、そんなに大きく道を外れることはないかなと思います。本日の発表の中にはボランティアの確保でありますとか、活動の充実に向けてのヒントがたくさんあったかと思えます。本日の会議が今後の全国の博物館にとりまして、ますますの発展に繋がって、入館者の増加に繋がればと思っております。本日はどうもありがとうございました。



みなさま、いつかどこかでお会いしましょう



永恵：副館長ありがとうございました。皆様、本日は大変長い時間にわたり、古代体験研究フォーラム2023にご参加いただきありがとうございます。本日の内容は、発表内容とトークセッションを文字起こしたものを、何とかな年度初めぐらいには、PDFの形で報告書にして館のホームページで公開をしたいと考えております。公開の際には、メールでご案内を差し上げますので、今後のご参考にしていただきたいと思います。

これをもちまして、古代体験研究フォーラム2023「ミュージアムとボランティア」を終了します。本当に長時間どうもありがとうございました。もし今日のトークセッションで尋ねたかったことがありましたら、個別にお問い合わせ、あるいは資料調査にお越しいただきたいと思います。本当に皆様どうもありがとうございました。昨年も言いましたが、皆様いつかまた、どこかでお会いしましょう。それでは、お元気で！



古代体験研究フォーラム 2023

「ミュージアムとボランティア」
事業実施報告書



発 行 日 令和6年12月5日発行

編集・発行 兵庫県立考古博物館

〒675-0142 兵庫県加古郡大中1-1-1

電話 079-437-5589
